新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集

上信越自動車関係発掘調査報告書II

大洞原（だいどうはら）C遺跡

1997

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として計画され、関越自動車道の群馬県藤岡ジャンクションから分岐し、群馬県・長野県を経て、新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車国道です。開通すると関越自動車道、磐越自動車道と並び、太平洋側と日本海側を結ぶ大動脈として沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この道路建設に先立ち発掘調査を実施した「大洞原Ｃ遺跡」の発掘調査報告書です。調査の結果、遺構は検出されなかったものの、縄文時代・弥生時代～古墳時代・奈良時代・平安時代の遺物が発見されています。弥生時代～古墳時代の土器には、隣接する長野県や北陸地方だけでなく、遠く東海・近畿地方の土器の系譜を引くものも含まれています。また、平安時代の土器は長野県北部と共通した土器様相を示しています。このように、頸城（くびき）地方は隣接地域との交流を深めながら、東海・近畿地方の文化の流入に対しても積極的に受け入れていることがわかりました。

今回の調査結果が、今後の本県における弥生時代～古墳時代、奈良・平安時代を解明する研究資料として活用されると共に、県民の方々の文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いであります。

最後に、この調査に対して多大なご協力とご援助を賜った妙高村教育委員会並びに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局・同上越工事事務所に対して厚く御礼を申し上げます。

平成９年７月

新潟県教育委員会

教育長　平　野　清　明

例　　言

1. 本報告書は新潟県中頸城郡妙高村大字坂口新田字山谷地244番地3ほかに所在する大洞原Ｃ遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団から受託して実施したものである。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成７年度に実施した。
4. 整理および報告書作成にかかる作業は平成７年度・平成８年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の註記記号は「ダイドウＣ」とし、出土地点・層位等を併記した。
6. 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
7. 本書に掲載した遺物番号は全て通し番号とし、本文、遺物観察表、図版、写真図版の番号は一致している。
8. 文中の註は脚註とした。また、引用文献は著者および発行年を文中に［ ］で示し、巻末に一括して掲載した。
9. 本書の記述は田海義正（埋文事業団主任調査員）、武田孝昭（同文化財調査員）、星奈津子（同文化財調査員）、三ツ井朋子（同文化財調査員）が分担執筆したもので、分担は以下の通りである。このうち、第Ⅱ章については平成８年３月31日に脱稿した。本書の編集は三ツ井が担当した。

第Ⅰ章 調査に至る経緯（田海）
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境
　１地理的環境（武田）
　２歴史的環境（星）
第Ⅲ章 調査の概要（三ツ井）
第Ⅳ章 遺跡の調査
　１・２（三ツ井）、３-A（田海）、３-B（三ツ井）、３-C（田海）、４-A（三ツ井）、４-B（田海）

10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・助言を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

新井市教育委員会、石黒立人、川村浩司、國島聡、小島幸雄、佐藤剛、高橋勉、滝沢規朗、親跡喬、中郷村教育委員会、早津賢二、妙高村教育委員会、安秀樹、渡邊朋和

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

1. 地理的環境 …… 2

A. 遺跡周辺の地理的環境 …… 2

B. 妙高火山の活動 …… 4

2. 歴史的環境 …… 6

A. 弥生時代 …… 6

B. 古墳時代 …… 8

C. 奈良・平安時代 …… 9

第Ⅲ章　調査の概要 …… 10

1. 第一次調査 …… 10

2. 第二次調査 …… 11

A. グリッドの設定 …… 11

B. 調査の方法と経過 …… 11

3. 調査体制 …… 12

4. 整理・報告の体制 …… 13

第Ⅳ章　遺跡の調査 …… 14

1. 概要 …… 14

2. 層序 …… 14

3. 出土遺物 …… 16

A. 縄文時代の遺物 …… 16

B. 弥生時代後期末から古墳時代前期の遺物 …… 17

C. 奈良・平安時代の遺物 …… 22

4. まとめ …… 24

A. 弥生時代後期末から古墳時代前期の土器について …… 24

B. 奈良・平安時代の土器について …… 26

要　　約 …… 27

引用・参考文献 …… 28

挿 図 目 次

第１図　上信越自動車道路線図 …… 1
第２図　遺跡周辺の地形 …… 3
第３図　遺跡周辺の地質 …… 5
第４図　遺跡周辺の遺跡分布図 …… 7
第５図　第一次調査対象範囲と試掘トレンチ配置図 ……10
第６図　第二次調査対象範囲とグリッド設定図 ……11
第７図　遺構確認面検出範囲 ……12
第８図　遺物出土状況 ……14
第９図　基本層序 ……15
第10図　土器の部位名称 ……17

表 目 次

別表１　縄文時代土器観察表
別表２　縄文時代石器観察表
別表３　弥生時代後期末から古墳時代前期土器観察表
別表４　奈良・平安時代須恵器・土師器・灰釉陶器観察表

図 版 目 次

図面図版

図版１　出土遺物実測図１
図版２　出土遺物実測図２
図版３　出土遺物実測図３
図版４　出土遺物実測図４

写真図版

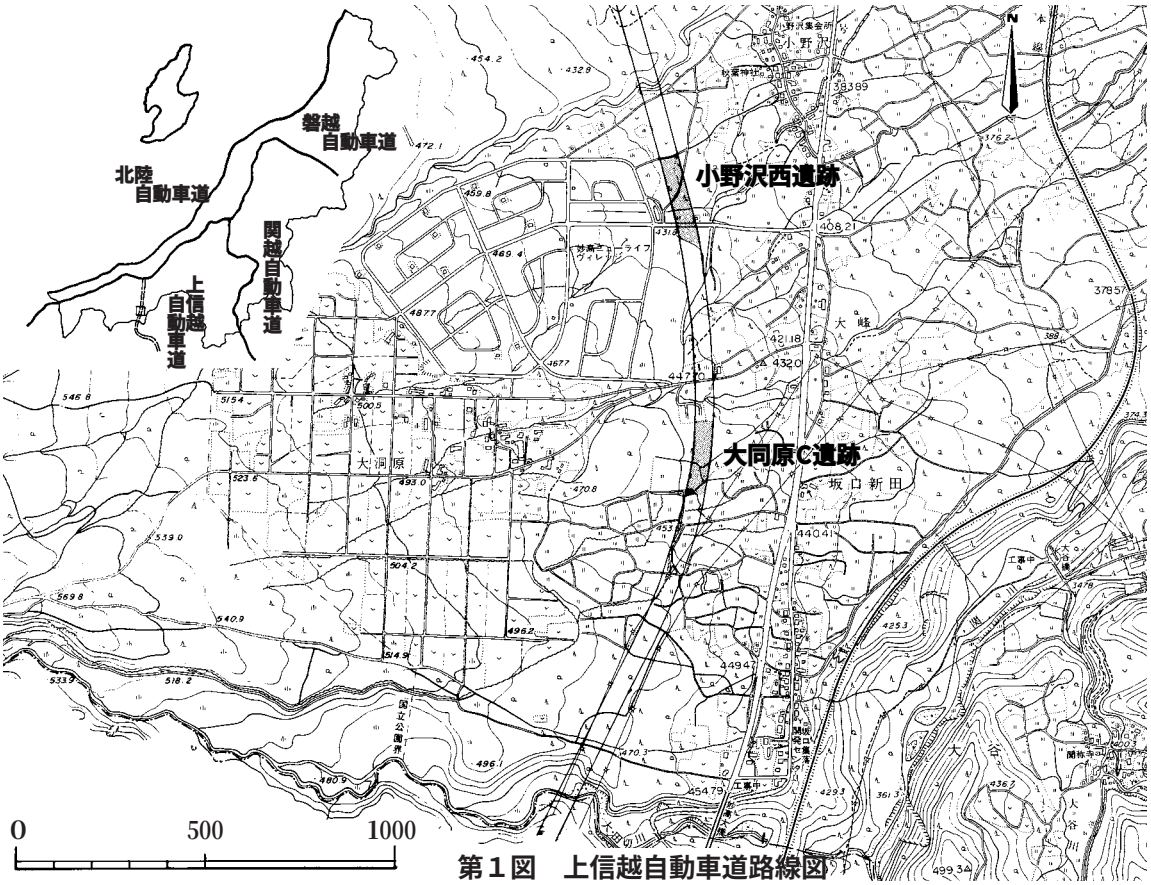
図版５　遺跡周辺航空写真
図版６　遺跡現況（南から）　遺跡現況（北から）　調査区北側作業風景
図版７　基本層序　１・２Ｆメインセクション土層断面　東側工事用道路部分完掘状況
図版８　遺物出土状況　６・７列の沢遺物検出状況（西側）　６・７列の沢完掘状況
図版９　６・７列の沢遺物出土状況（東側）　西側調査範囲中央部完掘状況　調査区北側完掘状況
図版10　出土遺物１
図版11　出土遺物２
図版12　出土遺物３

第Ⅰ章　調査に至る経緯

上信越自動車道は、新潟県上越地方から長野県・群馬県を経由して首都圏を結ぶ高速自動車国道である。自動車道は、群馬県藤岡ジャンクション（以下、ＪＣＴと省略）から新潟県上越ＪＣＴまでの延長203㎞を指し、現在長野県中野市の信州中野インターチェンジまで開通している。

大洞原Ｃ遺跡にかかる第10次施工命令区間（長野県中野市～新潟県中頸城郡中郷村・延長38.4㎞）は昭和63年9月に施工命令が出された。これを受け日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団と略す）は県教委に対し、道路建設予定地内の埋蔵文化財の分布状況について問い合わせた。県教委は同年11月14日から19日に長野県境の中頸城郡妙高高原町～中郷村間の３町村の遺跡分布調査を実施した。分布調査の結果、周知の遺跡14か所、新発見の遺跡２か所、遺跡推定地７か所、合計848,000㎡について確認調査が必要である旨を回答した。このあと県教委と道路公団で遺跡の確認・発掘調査について話し合いが持たれた。

本遺跡の第一次調査は、県教委から委託された埋文事業団が平成５年10月、平成６年６月、同年８月の３回にわたり合計22,300㎡を対象に実施した。対象範囲からは古墳時代、平安時代の土師器が出土した。また、南北両側に広がる水田部分は耕地整理により旧地形を留めていないことが確認された。県教委は一連の確認調査結果を受けて、11,580㎡について第二次調査が必要であると道路公団に通知した。第二次調査は、平成７年４月24日から８月11日までの期間に実施した。



第１図　上信越自動車道路線図

（中頸城郡妙高村発行「妙高村都市計画図2」1:10,000原図）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

１．地理的環境

A. 遺跡周辺の地理的環境

大洞原Ｃ遺跡が所在する中頸城郡妙高村は、新潟県南西部の頸城地方南部に位置している。村域の南西部は、村名の由来ともなっている妙高山（標高2,454ｍ）をはじめ、西側は火打山など新第三紀層の山々が西頸城山地を形成している。また村域の東側は東頸城郡松之山町の天水山から西へ弧を描くように延びる関田山脈の南端にあたり、長野県飯山市方面との境をなす。このように、妙高村は東西を山地に挟まれた形となっている（第２図）。

妙高村の中央部付近には関川が北流する。関川は火打山・焼山の山腹に源を発し、妙高山と黒姫山の間に谷を刻みながら東流し、妙高山の南東側、妙高高原町関川付近で北に進路を変える。この後、関川は大田切（おおたぎり）川や矢代川等の河川と合流しながら穀倉地帯である頸城（高田）平野を潤し、日本海に注ぐ。

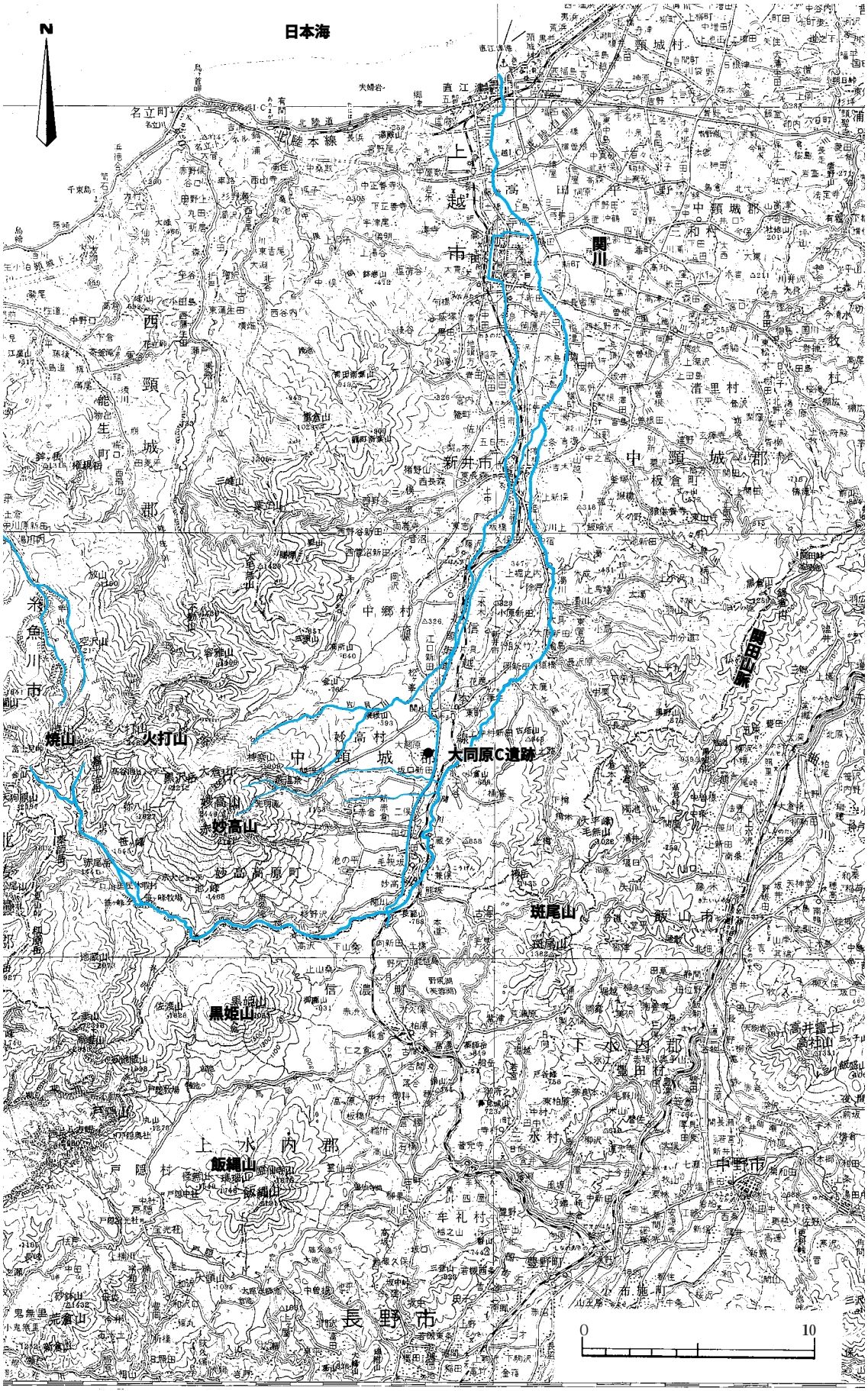
この関川を境に、妙高村域の両岸の地形は異なった様相をみせている。関川右岸は東頸城丘陵に続く関田山脈の広い丘陵地となっているが、左岸は妙高火山の活動によって形成された広大な緩傾斜地が広がる。

本遺跡は関川の左岸、妙高山東側の緩傾斜地上に位置し標高は440～450ｍを測る。遺跡の南側約1㎞には妙高山北地獄谷に源を発する大田切川が深い谷を刻んで東流し（４頁写真）、南東約1㎞の地点で関川に合流する。

遺跡の東側約300ｍの所には日本海側と長野盆地を結ぶ国道18号線が南北方向に走っている。現在の路線に改築整備される以前の国道18号線は、かつての北国街道にあたる。妙高村内では遺跡の北側に位置する関山神社前から小野沢集落を通り、遺跡の所在する坂口新田[1)]を経て、街道一の難所といわれた大田切川を渡る道筋を辿る。縄文時代においても、信州産黒曜石が頸城地方に搬入されていることなどから、街道として整備される以前から人々の往来があったと推測される。本遺跡はその交通路と距離を置かない地点に位置していたものと考えられる。

遺跡の位置する坂口新田は北国街道二俣・関川両宿場村の助成村として17世紀中頃から新田開発が進められた集落である。この地域は山間地であるため、年間を通じて冷涼な気候である。年平均気温をみると、平野の高田で13.1℃であるのに対し、関山では11.7℃と1.4℃も低くなっている。また豪雪地帯としても知られ、遺跡北側の関山では平均積雪量約２ｍ、多い時には最高深度が４ｍを超える年もある。これらの気候条件に加え、周辺の土壌は火山灰の風化により生成する黒ボク土であり、一般に酸性を示すため耕作土

１）遺跡の所在する坂口新田は近在の集落の中で唯一成立の由来・年代がはっきりしている新田村である。大田家所蔵の「坂口新田由来之事」によると正保３（1646）年12月に、幕府の使者が江戸から高田城下へ向かう途中、二俣宿を出発し関山宿を目指したが、激しい風雪のため道に迷い、二俣宿へ引き返し３日間足止めされた。この当時、関山村（現妙高村関山）と二俣村（現妙高高原町二俣）間には集落がなかったため、高田藩主松平光長の命により、慶安元（1648）年に関山宿と二俣宿間の助成を目的として坂口新田が開発された。



第２図　周辺の地形

国土地理院平成２年１月発行
高田１：20万地勢図

には適さないといわれている。現在では多くの用水が開削され、耕作も可能となっているが、用水開削以前は作物の栽培に必要な水を恒常的に得ることは非常に困難であった。このような厳しい自然環境のもと、用水の開発が行われる江戸時代以前には大規模な農耕地の開発は困難であったと推測され、このことが妙高山麓周辺で集落遺跡の発見例が少ない一因と考えられる。

▼

◄

大洞原Ｃ遺跡遠景（関温泉スキー場から撮影）

向かって右側の深い谷が大田切川。その左側に広がる緩斜面上に遺跡が位置する。
稜線は関田山脈であり、この山々を越えると長野県飯山市である。

B. 妙高火山の活動

妙高山は噴火活動によって形成された火山体であり、外輪山である神奈山、赤倉山などと共に「妙高火山」と総称される。この周辺には多くの火山体が集中しており、妙高山の南側には黒姫山、飯縄山が一直線に並び、西側には佐渡山と焼山が南北に位置する。野尻湖を挟んで東側には斑尾山が位置し、これら６つの成層火山の集まりを妙高火山群と呼んでいる［早津1985］。

妙高火山の活動は今から数10万年前、第四紀更新世の中頃に始まったと考えられ、大きく第Ⅰ～Ⅳ期の活動期と３回の休止期に分けられる。活動期に形成された成層火山体は、活動期末期から休止期の間に浸食を受けて崩壊し、やがてこれを土台として、再度成層火山体が形成されるという過程が繰り返されてきた結果、４つの火山体が重複した複式成層火山が形成された。つまり、現在の妙高山は中央火口丘と呼ばれる一番新しい火山体で、まわりを囲む神奈山などの外輪山はそれ以前に形成された古い妙高火山の姿なのである。

このような火山活動は周辺地域の地形形成に大きな影響を及ぼしている。特に活動末期に発生した高温の火山灰・火山砂・火山岩塊といった火砕物質とガスが一体となって高速で山腹を流下する火砕流や、火山体の崩壊によって生じた岩石片や土砂が高速で地表を流下する岩屑流、岩屑流よりも水分を多量に含む泥流といったものが山麓に堆積し裾野を成長させた。

現在に近い形となった第Ⅳ活動期は約３万年前に活動を開始し、先カルデラ期、カルデラ形成期、中央

火口丘形成期の３期に分けられる。約１万９千年前頃にカルデラ形成期が始まり、大規模な水蒸気爆発により、山頂部が大崩落を起こしてカルデラがつくられた。このとき発生した「関川岩屑流」は、妙高山の東から北東山麓に広く分布し、新井市の南端に位置する原通地区でも確認することができる。

これに続く中央火口丘の形成活動は約6,000年前に始まったと考えられ、山腹の北地獄谷と南地獄谷に沿って火砕流が扇状に流下し、東麓一帯に広がった。これを「赤倉火砕流」と呼んでいる。従来、放射性炭素年代測定法（以下、^{14}C年代測定法と略す）で得られていた赤倉火砕流堆積層の堆積年代は約5,800年前であったが、大洞原Ｃ遺跡の北東、約4.5㎞の位置にある道添（みちぞえ）遺跡内で採取された試料の^{14}C年代測定では約5,300年前という結果が得られている［早津1995］。この赤倉火砕流の噴出に引き続き、カルデラ内に粘性の大きな溶岩が多量に押し出され、巨大な中央火口丘が誕生した。

妙高火山最後の大規模な噴火は、中央火口丘から「大田切川火砕流」を噴出させたもので、今から約4,000～4,500年前頃に堆積したと推定されている［早津1985］。この火砕流は北地獄谷から大田切川に沿って流れ、片貝川と小二俣川にはさまれた地域に分布し、妙高村北東側の端にまで達した。

現在の妙高高原町・妙高村の緩傾斜地は赤倉・大田切川の２つの火砕流堆積物が基盤となって形成されたものであり、約4,000年前には現地形に近い様相を呈していたものと考えられる。

また、確認できる最後の活動は約2,600～3,000年前に起きたと考えられる水蒸気爆発で、この時降下した火山灰は黄橙色を呈し、本遺跡でも沢の中では層状に、窪地ではブロック状に堆積しているのが確認されている。

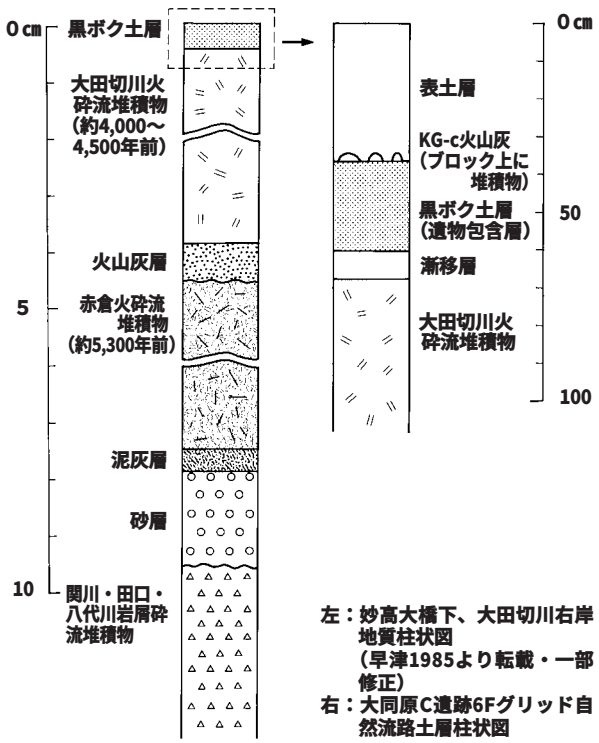
妙高火山が最後の活動を開始したおよそ3,000年前、妙高火山群の北端に位置している焼山（標高2,400ｍ）でも噴火活動が開始された。焼山は昭和期にも３回の水蒸気爆発を起こしており、現在も活動を続けている火山である。

火打山から妙高山にかけて点在する天狗の庭・高野（こうや）池・黒沢池などの湿原の堆積物中には、高野池火山灰グループ（ＫＧ）と呼ばれる複数の火山灰層があり、その中の５層が焼山起源の火山灰層と見られ、上位からＫＧ－ｄ、ＫＧ－ｅと分類される。このうちＫＧ－ｃ火山灰層は、焼山起源の火山灰層の中では最も広範囲に分布し、焼山の東方一帯、新井市の周縁部にまで広がっている。

この火山灰層は灰白色を呈し、大洞原Ｃ遺跡をはじめ、隣接する小野沢西遺跡や約1.8㎞北方の柳平遺跡［大滝・小池1996］等でも確認されている。

ＫＧ－ｃ火山灰層の噴出時期は、中郷村籠峰遺跡において、溝状遺構内に堆積したこの火山灰層下で平安時代の須恵器が出土していること、ならびに^{14}C年代測定値から、今から約1,000年前の平安時代の中頃とされる［早津1994］。

このような妙高火山・焼山起源の火砕流・火山灰の堆積層は山麓の各遺跡内から検出されており、遺物包含層と対比させることにより、遺跡の年代決定の際、指標のひとつとなっている。



第３図　遺跡周辺の地質

２．歴史的環境

ここでは長野県境の妙高山麓から頸城平野南部における弥生時代から奈良・平安時代の遺跡を概観する。遺跡の内容については埋蔵文化財包蔵地カードをもとに既刊の発掘調査報告書および現地説明会資料等の知見を加え、平成8（1996）年2月現在の遺跡分布状況を第４図に示している。ただし、石塔・石仏については割愛し、また複合遺跡については主にここで取り扱った時代を優先してドット化した。

この地域の地形は妙高山や関田山脈、及びこれらに連なる丘陵等からなる山麓部と、頸城平野やその周縁の扇状地・低丘陵等からなる平野部に大きく二分されるもので、両地形の境界はおおよそ新井市長森と吉木を結んだラインとする。

両地形間では遺跡の分布状況においても異なった様相が観察できる。山麓部は全体的に遺跡の発見例が少なく、なかでも弥生・古墳時代の遺跡分布は希少である。奈良・平安時代については遺跡分布は少数であるものの、近年の上信越自動車道建設に伴う発掘調査により妙高山の東側山麓に小規模な遺跡の点在が確認され、当時の開発状況の一端が明らかになりつつある。

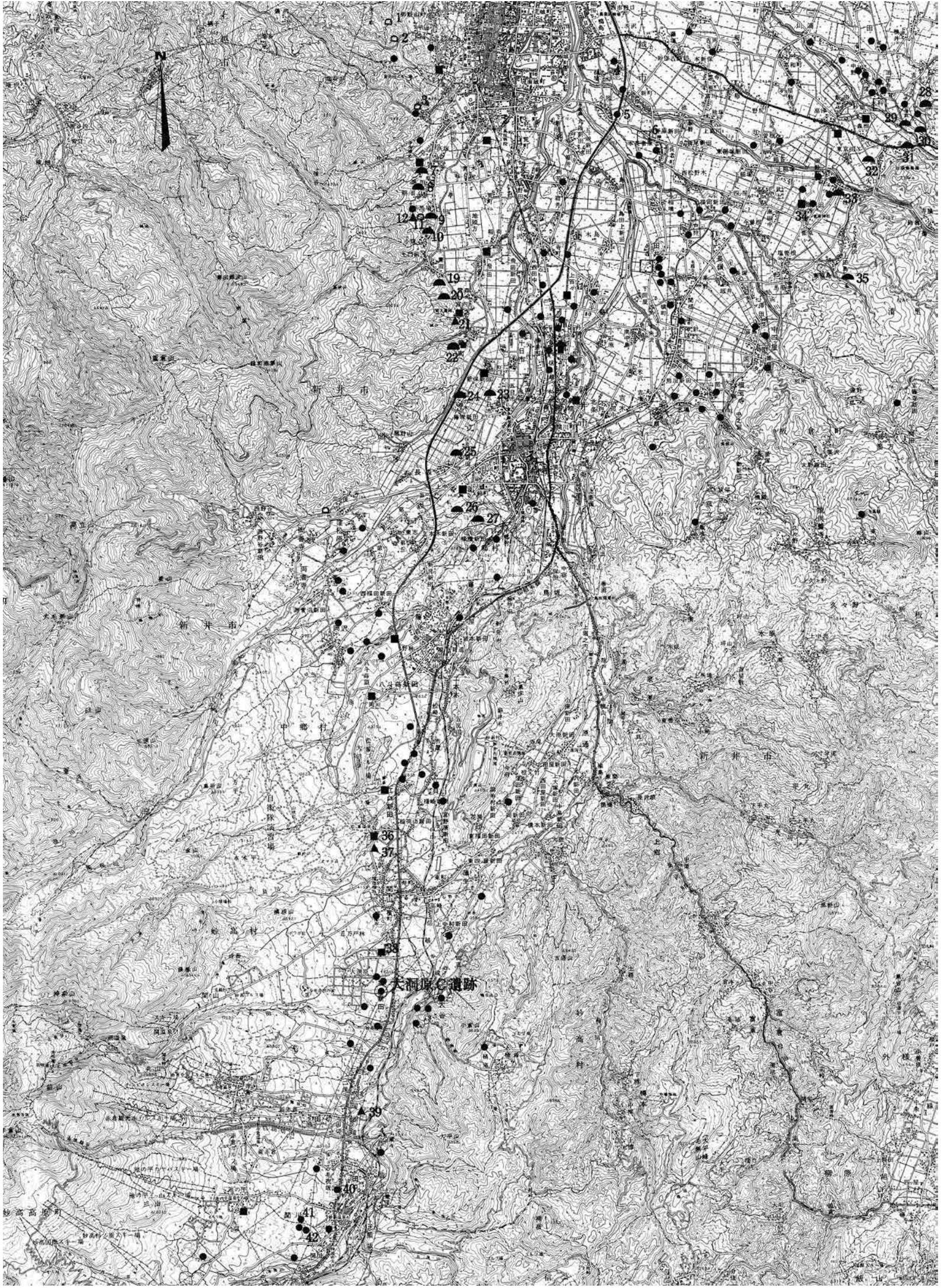
平野部は山麓部に比して遺跡の分布が多い。頸城平野周縁部の扇状地や丘陵裾には古墳時代後期の群集墳が集中的に分布するのに加えて、近年沖積層に埋没する弥生・古墳時代の集落遺跡の発見例も増えており、頸城平野の開発が早い時期にさかのぼることが明らかになった［高橋1993］。また奈良・平安時代についても引き続き沖積地を中心に分布が拡大しており、官衙に関連すると考えられる遺跡の分布もみられる。以下、各時代ごとに遺跡の分布状況を概観する。

A. 弥生時代

弥生時代の遺跡の分布は山麓部・平野部ともに希薄である。

山麓部ではこれまで中郷村籠峰遺跡で前期から後期末葉の土器の出土が報告されていたほか、妙高高原町伏見遺跡で土器片が採集されているのみであった。しかし上信越自動車道建設に伴う発掘調査により、本遺跡と中郷村和泉Ａ遺跡でも遺物が検出された。和泉Ａ遺跡で出土した土器は前期末から中期初頭に位置づけられるもので、県内では報告例の少ない貴重な資料として注目されている［荒川1995］。和泉Ａ遺跡でピットが検出されたほかは、遺物の出土のみで確実な遺構の検出はなく、遺跡の性格は不明である。

平野部で前期にさかのぼる遺跡は現在までに確認されていない。中期の遺跡は関川右岸の沖積段丘上に立地する新井市上百々（かみどうどう）遺跡が知られており、沖積地の開拓が弥生時代にはすでに始まっていたことを示唆している［高橋1993］。後期に入ると新井市斐太遺跡群や上越市下馬場遺跡など、丘陵上に立地する集落、いわゆる高地性集落が頸城平野西側に現れる。斐太（ひだ）遺跡群は環濠を伴う大規模な集落として東日本有数の遺跡である。これまでに２回の部分的な調査が行われ、半埋没状態の竪穴住居跡70基以上とこれを取り囲む総延長656mにおよぶ環濠が確認されている［駒井・吉田1962］。出土土器は後期後半から古墳時代初頭が主体であるが、近年の研究により一部中期にさかのぼる土器の存在も指摘されており［滝沢1995］、集落が営まれ始めた時期も再検討されつつある。下馬場遺跡は斐太遺跡群から北へ約２ｋｍの地点に位置する遺跡である。確認調査の結果、半埋没状態の竪穴住居跡が４基確認され、付近で出土した土器から後期に位置づけられるものとされた［小島1989］。こうした高地性集落の出現は、背後に大きな軍事的緊張が存在したことを示すものであり、畿内政権の外圧を想定する説がある［麻柄1983］。



1	滝寺古窯跡	奈良・平安（8～9C）
2	大貫古窯跡	平安（9C）
3	向橋窯跡	奈良
4	子安遺跡	弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安・中世
5	今池遺跡	奈良・平安・中世
6	本長者原廃寺	奈良・平安
7	灰塚古墳群	古墳（後）
8	黒田古墳群	古墳（後）
9	南山古墳群	古墳（後）
10	稲荷山古墳群	古墳（後）
11	下馬場古窯跡	奈良
12	下馬場遺跡	弥生（後）
13	上百々遺跡	弥生（中）・古墳（前）
14	倉田遺跡	古墳（後）・奈良
15	杉明遺跡	古墳（後）・奈良・平安（9～10C）
16	栗原遺跡	古墳・奈良
17	月岡遺跡	古墳（中）・平安（9～10C）・中世
18	宮ノ本遺跡	古墳（後）・奈良・平安
19	青田古墳群	古墳（後）
20	観音平古墳群	古墳（後）
21	斐太遺跡群	弥生（後）・古墳（前）
22	天神堂古墳群	古墳（後）
23	谷内林古墳群	古墳（後）
24	梨ノ木古墳群	古墳（後）
25	小丸山古墳群	古墳（後）
26	上中古墳群	古墳（後）
27	小出雲古墳群	古墳（後）
28	水吉古墳群	古墳（後）
29	水科古墳群	古墳（後）
30	宮口古墳群	古墳（後）
31	北方古墳群	古墳（後）
32	南方古墳群	古墳（後）
33	菅原古墳群	古墳（後）
34	岡嶺遺跡	古墳（後）・平安（8C末～9C）
35	大塚古墳	古墳
36	和泉A遺跡	縄文(前～晩)・弥生(前～中)・古墳(前)
37	籠峰遺跡	縄文(前～晩)・弥生(前～後)・平安
38	小野沢西遺跡	縄文(晩)・弥生(後)・古墳(前～後)
39	伏見遺跡	弥生（前）
40	東浦遺跡	縄文（前）・平安（9～10C）
41	関川谷内B遺跡	縄文(早～中)・古墳(前)・平安(9～10C)
42	中ノ沢遺跡	縄文(早～前、後)・平安(9～10C)

凡例

▲ 弥生時代　● 奈良・平安時代
■ 古墳時代　◠ 窯　跡
◠ 古　墳　□ 寺院跡

国土地理院　平成５年９月発行
１：50,000　原図
「高田東部」「高田西部」「飯山」「妙高山」

第４図　周辺の遺跡分布図

B. 古墳時代

古墳の分布は山麓部が発見例の全くない空白地帯であるの対して、平野部は県内でも有数の古墳集中地域であり、頸城平野周縁には後期の群集墳が密集している。

前期の古墳について発見例は報告されていないが、近年の確認調査で上越市子安遺跡で円形の周溝遺構と土坑が検出され、古墳時代初期の墓制の一形態である可能性が指摘されている［上越市教委1993］。

中期に属する古墳は一例のみ報告されている。関川右岸の扇状地上に立地する新井市月岡遺跡で沖積層に埋没する３基の円墳が検出された。周溝底部から出土した土師器の年代から、５世紀中葉に位置づけられる初期的な群集墳と考えられている［高橋1985］。

後期になると多くの群集墳が頸城平野の東西周縁部に現れる。これらは横穴式石室の有無により、大きく２グループに分けられる。横穴式石室をもたないグループは頸城平野西側の南葉山麓に灰塚・黒田・南山・稲荷山・青田・観音平・天神堂の７古墳群あり、総数は200基を超える。造営年代は６世紀を主体として、一部５世紀にさかのぼる［坂井1995］。最大規模の天神堂古墳群は現在までに数度の調査が行われ、このうち90号墳の内部主体が天井石をもたない石室であることが確認された［中川・岡本1961］。これにより主体部は木棺を石で囲って直接盛土したものと推定されている［甘粕1986］。以上の古墳群に対して横穴式石室をもつグループは東頸城丘陵縁辺部と頸城平野西南部の扇状地上に分布する。造営年代は６世紀中葉から７世紀とされている［坂井前掲］。東頸城丘陵縁辺部の一群は水吉・水科・宮口・北方・南方・菅原・大塚の７古墳群からなり、墳墓の総数は200基を超える。このうち菅原古墳群は最大の古墳群で、頸城平野唯一の前方後円墳を含む。現在に残されている調査記録によると、円墳４基の石室から直刀や鉄鏃、鎧の断片などが検出されている。ほかの古墳群でもほぼ共通して武器・武具が副葬されていることから、この一群の造営主体は軍事的性格を備えた集団と推定されている［甘粕1986］。頸城平野西南部の一群は梨ノ木・谷内林（やちばやし）・小丸山・上中（かみなか）・小出雲（おいずも）の５か所の古墳群からなる。墳墓の総数は50基を数えたが、現在では半数近くが壊滅している。梨ノ木３号墳は1975年に調査され、1～1.5ｔの巨石を用いた大型の横穴式石室をもつことが確認された［宮腰1977］。

一方、集落遺跡の発見例は山麓部・平野部ともに多くない。

山麓部では関川左岸の妙高山麓に数か所の遺跡が点在するが、集落遺跡は未だ確認されていない。しかし平成７（1995）年に行われた本遺跡と、近接する小野沢西遺跡の調査で当該期の土器が多量に出土したため、集落の存在が想定されるようになり、これまで空白地帯だった山麓部の様相が明らかになりつつある。

平野部では多くの古墳群の存在に比して集落遺跡の発見例は非常に少数だったが、近年新井市教育委員会の調査により、沖積地上の微高地に立地する住居跡の存在が確認されている。前期の遺跡には弥生時代の項で先述した上百々遺跡があり、確認調査の結果、竪穴住居状の遺構と溝が古式土師器とともに検出された。中期については前述の月岡遺跡があげられる。住居跡は未確認であるが井戸２基と土坑が検出されており、集落の存在が確実視されている。後期に入ると遺跡数は増加する。宮ノ本遺跡で確認調査により６世紀代の竪穴住居跡が一基、また倉田遺跡では水田跡が検出された。７世紀代の遺跡には杉明（すいみょう）遺跡があり、竪穴住居跡が30基検出されて大規模な集落の存在が推測されている。また栗原遺跡、前述の倉田遺跡などでも集落跡が確認された［高橋1984･85･93･96、新井市教委1995］。一方、東頸城丘陵の岡嶺段丘上には岡嶺遺跡が存在する。竪穴住居跡が２基検出されており、出土土器より７世紀初めから中頃の時期が与えられている［秦1990］。同段丘上には菅原古墳群があり、近接するほぼ同時期の集落として注目される。

C. 奈良・平安時代

奈良時代と平安時代初頭にあたる８世紀代の遺跡は、平野部の扇状地・自然堤防上・丘陵端部を中心にに分布しており、山麓部での発見例は少ない。新井市の矢代川や関川沿岸に形成された扇状地には頸城郡衙関連遺跡と推定されている栗原遺跡を中心に遺跡が集中して分布している。近年の発掘調査によりこれらの遺跡のほとんどが古墳時代までさかのぼる遺跡であることが確認されており、早い時期から沖積地の開発が盛んに行われていたことを示唆している。生産遺跡は頸城平野西側の丘陵裾に上越市下馬場古窯跡・向橋（むかばし）窯跡・滝寺古窯跡・大貫古窯跡が存在しており、窯業地帯のひとつを形成している。操業の開始は下馬場古窯跡が頸城平野最古で、７世紀末葉～８世紀初頭と考えられている［小島1989］。

９世紀に入ると平野部で引き続き分布の拡大がみられる一方、山麓部でも数例の遺跡が点在する。これまで山麓部は当該期の遺跡の調査例が少なく、開発の状況が不明であった。しかし、上信越自動車道建設に伴う発掘調査で住居跡の存在が数例確認され、新たな知見が得られつつある。妙高高原町東浦遺跡で掘立柱建物が２基検出された例［小田1993］をはじめとして、同町の関川谷内（せきかわやち）Ｂ遺跡で竪穴住居跡が２基［小池1996ａ］、中ノ沢遺跡で竪穴住居跡が３基発見された［阿部1995］。いずれの遺跡でも北部信州地方と共通する土器が出土しており、古代における頸城と信濃の交流の様子がうかがえる。また、これらの遺跡では多くが９世紀後半から10世紀初頭に属する住居跡が検出されている。平野部が古墳時代に引き続いて奈良・平安時代でも開発が盛んであったのに対して、山麓部では平安時代以降、比較的継続期間の短い小集落が散在していたと推測される。

文献資料では「和名類聚抄」に頸城郡内に存在する郷として「沼川（ぬのかわ）・都宇・栗原・荒木（原木）・板倉・高津・物部・五公（いきみ）・夷守（ひなもり）・佐味（さみ）」の10郷が記載されている。山麓部に比定される郷は不明であるが、頸城平野には「沼川・荒木」を除く８郷の比定地がほぼ推定されており、越後国では際立って郷の数が多い[1]。これは人口密度の高さ[2]とその背景となる生産力の高さを示すものであり［坂井1993ｂ］、開発の進展を間接的に証明するものである。また、「和名類聚抄」には頸城郡内に越後国府が設置されていたことも記載されている。これに伴って国分寺・国分尼寺・頸城郡衙の存在も推定されているが、所在地については諸説があり確定していない。現在それぞれの最有力地と目されている遺跡はいずれも関川沿岸に立地している。国府・国分寺関連遺跡には上越市今池遺跡群とそれに近接する本長者原廃寺があげられる。今池遺跡群は国道18号線バイパス建設に先立って発掘調査が行われ、計画性をもつ建物群跡の検出や円面硯・墨書土器など特殊遺物の出土があった。政庁に相当する建物跡は未確認であるが、官衙的な性格をもつ遺跡と考えられている［坂井1984］。本長者原廃寺は上越市教育委員会の確認調査により14m四方の建物基壇跡が検出され、国分寺である可能性が高まっている［小島1984］。一方、頸城郡衙関連遺跡として新井市栗原遺跡が有力視されている。９次にわたる発掘調査が実施された結果、掘立柱建物群跡や、円面硯・銅製帯金具・「郡」と墨書された須恵器蓋などが検出された［坂井ほか1982］。また同時期の倉田遺跡では３基の倉庫跡を含む掘立柱建物群が検出されたほか、円面硯や栗原遺跡と同じ瓦の出土がみられ、栗原遺跡に深く関係する遺跡と考えられている［高橋1996］。

1）　越後国７郡のうち頸城郡を除く６郡はすべて３～５郷である［『新潟県史』資料編２］。

2）　１郷の人口は1400人［沢田1972］～1500人［鎌田1984］と推定されている。

第Ⅲ章　調査の概要

１．第一次調査

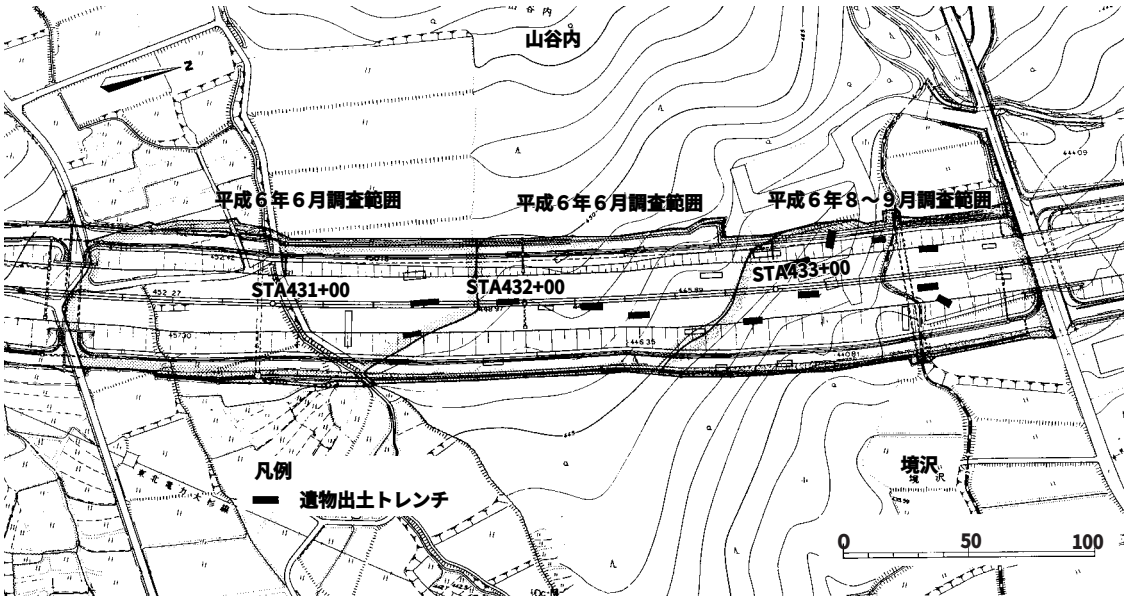
平成５年から６年にかけて22,300㎡を対象として第一次調査を実施した。調査対象範囲内には未買収地があったため、平成５年10月29日～11月２日、平成６年６月29日～30日、８月30日～９月６日の３回にわたり、買収の終了したところから順次調査を行った（第５図）。調査は、対象範囲内に合計32か所のトレンチを任意に設定し、バックホーを使用して徐々に掘り下げながら、調査員による精査を並行して行い、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。

初回の調査は、対象範囲のほぼ中央部7,800㎡について調査を実施した。設定した13か所のトレンチのうち６か所で土師器片101点が出土しており、遺物の分布が対象範囲全体に見られることから、全対象範囲について第２次調査が必要であると判断した。しかし、調査予定地の南北に未買収地があることから遺跡範囲を決定するには至らなかった。

第２回目は、南側7,200㎡を対象範囲としたが、南端に広がる水田部は耕作により地形改変を受けているものと判断し、調査範囲から除外した。水田部以外の範囲には、５か所のトレンチを設定した。遺構は検出されなかったが、３か所から弥生時代後期末～古墳時代前期、平安時代のものと考えられる土師器片23点が出土した。この結果、STA431+00付近を遺跡の南限とした。

３回目は、対象範囲の北側7,300㎡に対して調査を実施した。設定した14か所のトレンチのうち８か所から古墳時代、平安時代の土師器が出土した。また、境沢以北の水田部は昭和20年代初めの耕地整理で旧地形を留めていないことが分かり第二次調査対象範囲から除外し、STA433+20付近を北限とした。

以上３回にわたる第一次調査の結果、第二次調査対象面積を11,580㎡と確定した。

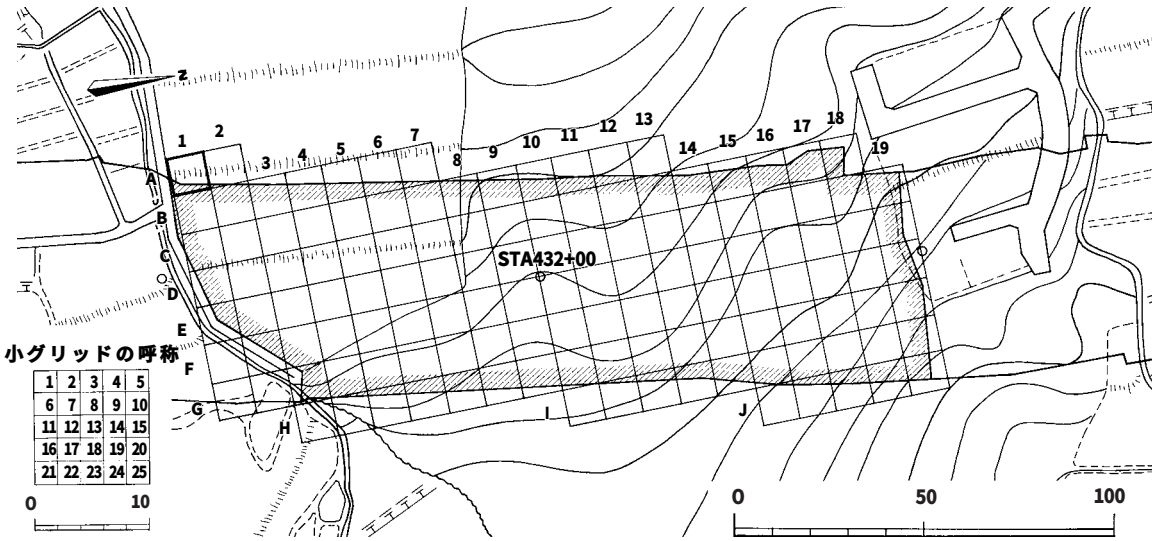


第５図　第一次調査対象範囲とトレンチ配置図

2．第二次調査

A. グリッドの設定

調査範囲全体に10m方眼を設定し、調査地点の呼称を簡便化することを目的として、測量業者に基準杭の打設を委託した。上信越自動車道のセンター杭、STA432+00（X＝101230.9672、Y＝－25069.5226）を基準点とし、国家座標の軸に従って10m四方の大グリッドを設定した（第６図）。大グリッドは南北方向では南から算用数字を付し、東西方向では西からアルファベットを付して「５Ｄ」のように組み合わせて呼称した。また、この大グリッドを２m四方に25等分したものを小グリッドとした。小グリッドには１～25の算用数字を付し、大グリッド表示に続けて「５Ｄ３」のように表記した。



第６図　第二次調査対象範囲とグリッド設定図

B. 調査の方法と経過

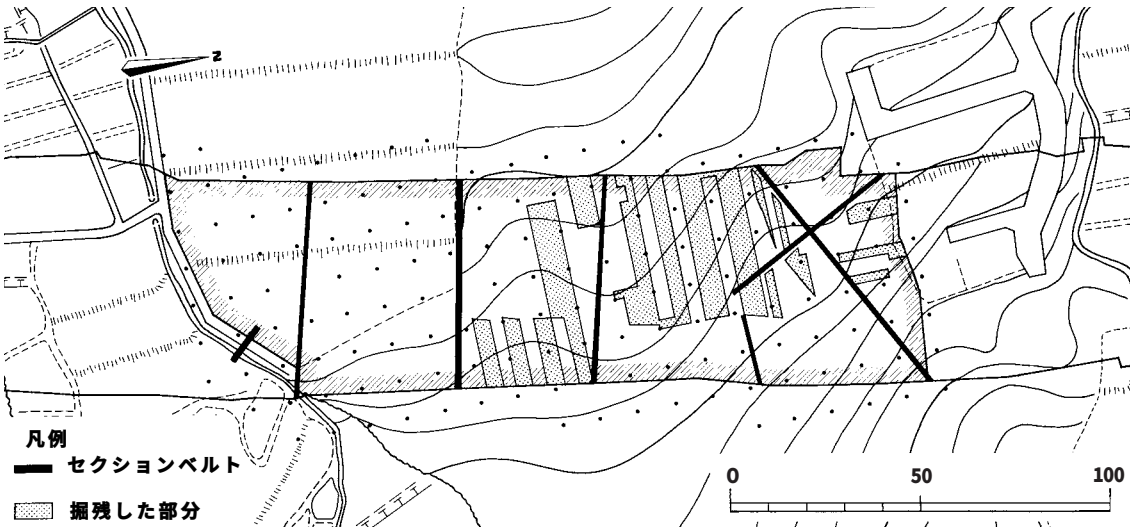
第二次調査は11,580㎡を対象として、平成７年４月24日～８月11日まで実施した。第二次調査対象範囲のうちSTA433+00以北は調査開始直後、別荘地造成により削平されていることを確認し、調査範囲から除外した。調査は対象範囲東辺の工事用道路予定地の引き渡しを急いだため、この範囲を先行して実施した。

表土除去はバックホー１台（0.7　級）を使用し調査員の指示により徐々に掘り下げた。包含層発掘は作業員が調査員の指示のもとで進めた。遺物は、層位別に小グリッド一括で取り上げた。遺構は検出されなかった。以下、東辺の工事用道路予定地を東側工事用道路部分、これを除いた範囲を西側調査範囲と呼称し、各々の調査経過を記述する。

東側工事用道路部分　東辺の幅杭から約15mの幅をとって調査範囲を設定した。４月25日から表土除去を開始した。この時点で調査区北側（17～19Ｉ・Ｊ）には平安時代の遺物が集中し、南側（４～７Ｇ・Ｈ）には弥生時代後期末～古墳時代前期の土師器片が集中的に分布することを確認した。５月９日からは作業員を投入して包含層発掘を開始した。遺物の分布が集中する南北両端から掘り進めたが、８～10列は遺物の分布が極めて希薄であったため２～３m幅のトレンチ掘りを行った。しかし、トレンチ内からは遺構・

遺物が検出されなかったため、トレンチ間の未発掘部分については掘削を行わなかった（第７図）。６月23日に調査を終了し、同日、東側工事用道路部分とすでに調査の終了していた７列以南の範囲を合わせた計4,970㎡について道路公団への引き渡しを完了した。

西側調査範囲　東側工事用道路部分を除いた調査範囲を西側調査範囲と呼称する。東側工事用道路部分の調査と並行して、５月12日から表土除去を開始し、６月７日から包含層発掘に入った。東側同様、６～８列と16～18列付近を東西に流れる沢の周辺で遺物の分布が集中するが、それ以外の範囲では極めて希薄であり、ここでも４～６ｍ幅のトレンチ掘りを行った。８月11日に調査を終了し、同日全ての第二次調査対象範囲について道路公団への引き渡しを完了した。



第７図　遺構確認面検出範囲

３．調査体制

平成５・６年度

主　体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

管　　理　藍原直木　（専務理事・事務局長）

渡辺耕吉　（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶　　務　平成５年度　藤田守彦（総務課主事）

平成６年度　泉田　誠（　　同　　）

調査指導　藤巻正信　（調査課調査第一係長）

［第一次調査］平成５年10月29日～11月２日

調査職員　小池義人（調査課専門員）

佐藤正知（　同　主任）

藤田豊明（　　同　　）

［第一次調査］平成６年６月29日～６月30日

調査職員　土橋由理子（調査課文化財調査員）

大滝良夫　（　同　主任調査員）

武田孝昭（　同　専門員）

平成７年度

主　体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）

調　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）

管　　理　藍原直木　（専務理事・事務局長）

山上利雄　（総務課長）

亀井　功　（調査課長）

庶　　務　泉田　誠　（総務課主事）

調査指導　藤巻正信　（調査課調査第一係長）

［第二次調査］平成７年４月24日～８月11日

調査職員　田海義正　（調査課主任調査員）

三ツ井朋子（　同　文化財調査員）

村山良紀　（　同　嘱託）

４．整理・報告の体制

出土遺物の水洗・註記作業は、発掘調査と並行して調査現場および埋文事業団曽和分室で行い、接合・復元作業は平成７年９月から11月にかけて埋文事業団曽和分室で実施した。本格的な整理作業は平成７年１月から平成８年３月にかけては埋文事業団曽和分室で実施し、平成８年12月から平成９年３月にかけては新津市に新設された新潟県埋蔵文化財センターで実施した。以下に各年度の整理体制と主な作業内容を示す。

平成７・８年度

主　体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）

調　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）

管　　理　藍原直木　（専務理事・事務局長）

山上利雄　（総務課長）

亀井　功　（調査課長）

庶　　務　泉田　誠　（総務課主事）

調査指導　藤巻正信　（調査課調査第一係長）

平成７年度　指　　導　藤巻正信　（調査課調査第一係長）

職　　員　田海義正　（出土遺物の整理・実測・写真撮影）

武田孝昭　（原稿）

星　奈津子（出土遺物実測・原稿）

三ツ井朋子（出土遺物の整理・実測・写真撮影・挿図作成・原稿）

平成８年度　指　　導　藤巻正信　（調査課調査第一係長）

職　　員　三ツ井朋子（原稿・編集）

田海義正　（原稿）

星　奈津子　（挿図作成）

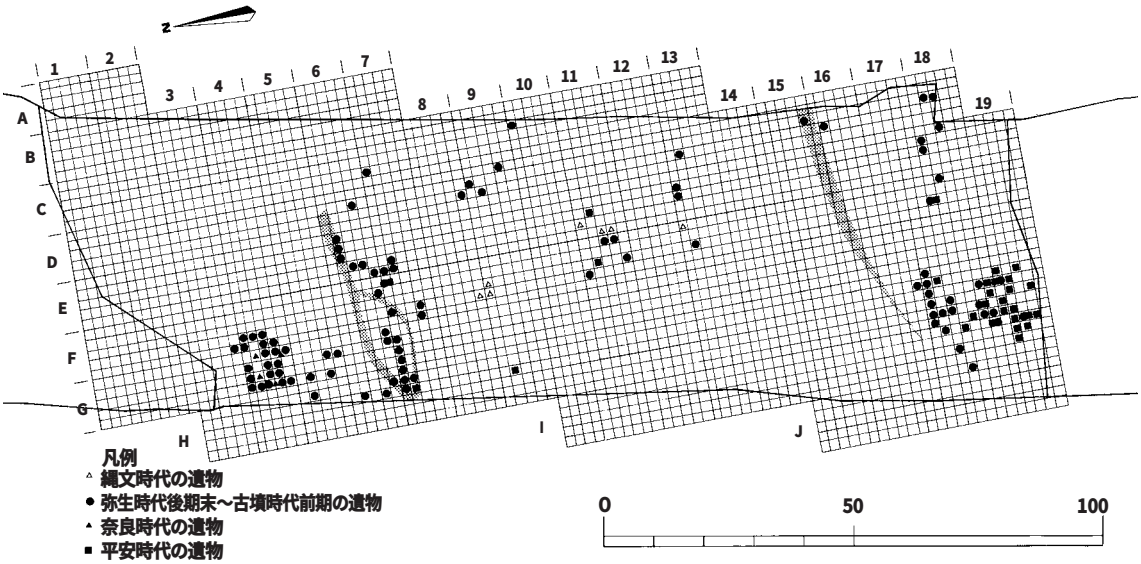
第Ⅳ章　遺跡の調査

１．概要

大洞原Ｃ遺跡は妙高山東麓の緩傾斜地上に位置し、標高440～450mを測る。６・７列と16・17列には西から東へ沢が流れており、この２本の沢により緩斜面は南北に３分割される。今回の調査では遺構は検出されなかった。

遺物の分布は６・７列の沢（以下南側の沢）と16・17列の沢（以下北側の沢）の周辺に集中し、両者に挟まれた８～15列の緩斜面と１～４列の休耕田では遺物分布が希薄であった（第８図）。南側の沢と北側の沢では出土土器の所属時期に偏りが認められる。

南側の沢の堆積層中および、沢以南の緩傾斜面上には弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が集中して出土した。一方、北側の沢の堆積層中からは弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土し、沢の北側にあたる18・19H・Ｉでは平安時代の土師器が集中して出土した。このほか、奈良時代の須恵器や縄文時代後期の土器・石器が僅かに出土している。



第８図　遺物出土状況

２．層序

調査区は全体的に東側へ緩やかに傾斜している。現況は南半部が水田を転用した牧草地であり、北側は山林であった。牧草地部分は一部水田造成時の削平が基盤層にまで及んでいた。

現在の地形形成に多大な影響を与えた大田切川火砕流堆積物を基盤層として、その上層に遺物を含む黒ボク土が堆積している。今回の調査では、表土層から基盤層までを４層に分層した。層厚は全体的に均一である。以下に基本層序を示す（第９図）。

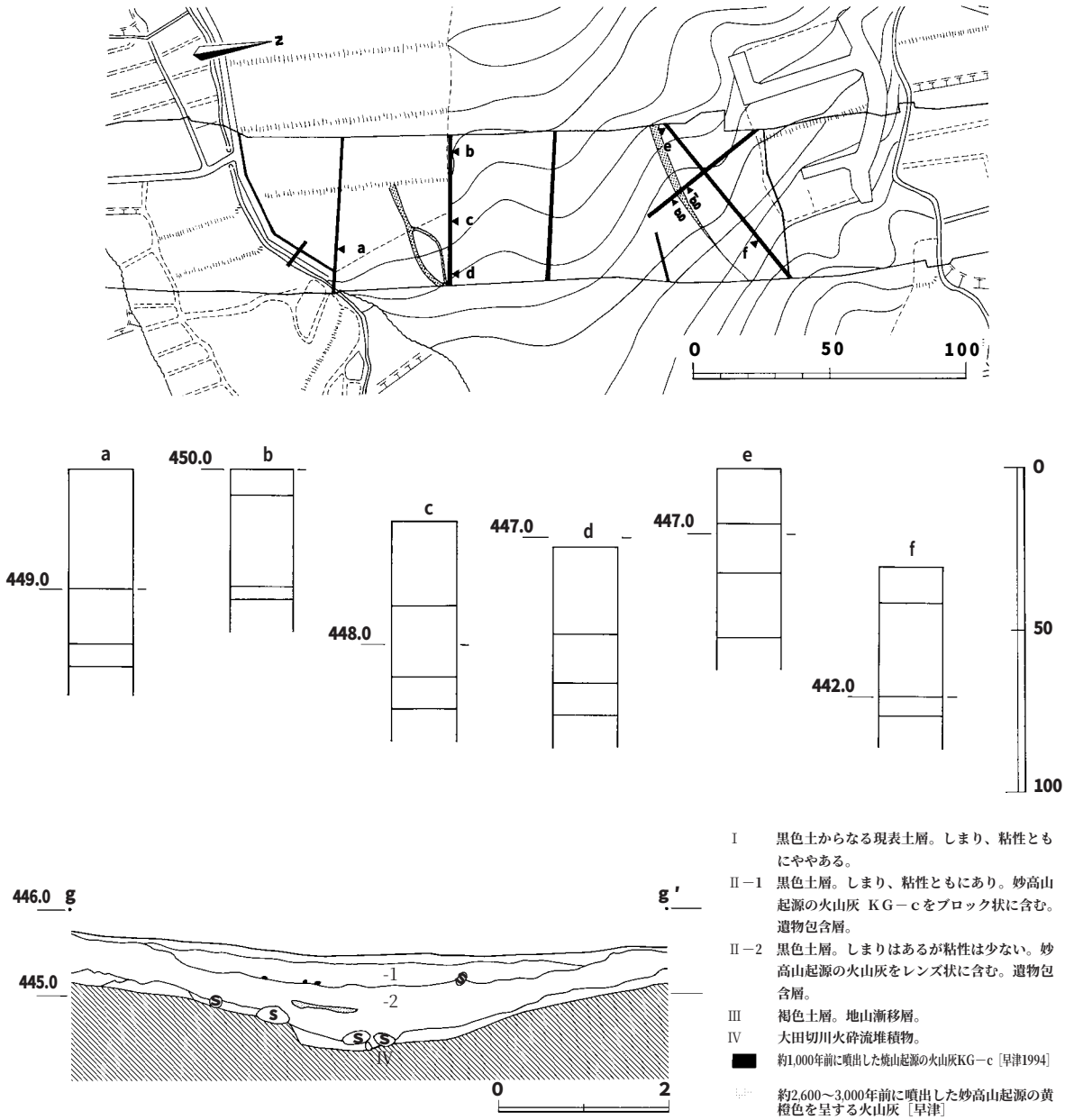
Ⅰ層：黒色土からなる現表土層。しまり、粘性ともにややある。

Ⅱ層：黒色土層。いわゆる黒ボク土層である。しまりはあるが、粘性は少ない。層厚は平均約30㎝を測り、含有物が少なく均質である。縄文時代後期～平安時代の遺物が混在する遺物包含層である。
沢の堆積層、上面の窪地には灰白色の焼山火山灰（ＫＧ－ｃ）や約2,600～3,000年前に妙高山の水蒸気爆発によって噴出した黄橙色の火山灰がレンズ状に堆積していた（第Ⅱ章，１参照）。縄文時代後期～平安時代の遺物包含層。

Ⅲ層：褐色土層。地山漸移層。黒褐色を呈し、直径約５～10㎝の火砕礫を含む。部分的に堆積していない箇所が認められる。弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物包含層。

Ⅳ層：大田切川火砕流堆積物。しまり・粘性ともにややあり、褐色を呈する。直径15～50㎝の火砕礫を多く含む。

遺物包含層はⅡ層とⅢ層である。縄文時代後期から平安時代までの遺物が混在する。火山灰の上下で遺物の所属時期を分離する可能性を探ったが、明確な差異は認められなかった。



第９図　基本層序

３．出土遺物

大洞原Ｃ遺跡の出土遺物の総量は平箱（54×34×10㎝）で６箱である。前述の通り、遺物は南側と北側の沢周辺に集中して分布し、遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層、および沢の堆積土層中から出土している。内容は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が５箱、奈良・平安時代の土師器・須恵器が１箱、縄文時代後期後葉の土器、石器が合わせて20点である。

報告書掲載にあたっては石器４点、および器種が明かな口縁部片を中心に、縄文土器５点、弥生時代後期末から古墳時代前期の土器54点、奈良・平安時代の土器11点の計74点を抽出し、図化した。計測値・石材・胎土などについては巻末の観察表に詳しい。

A. 縄文時代後期の遺物（図版１、別表１・２）

縄文時代後期の遺物は８・９Ｆ、11ＥのⅡ層中から５個体分と見られる深鉢形土器の小破片が出土し、４Ｂ、４・７・18ＦのⅡ層中から石器４点が出土した。

土器（１～５）

１は復元口径28㎝、体部下半が遺存している。口縁部は内彎気味に開き、体部上半でくびれ下半はややふくらむ。口縁は低い波状を呈し、口唇部を外反させ外面口縁直下に幅広の沈線を巡らす。波頂部は押し潰されたように偏平となる。無文で内外面ともミガキが施される。口縁部には土器焼成後に開けられた孔が３か所認められる。２は復元口径15.0㎝。口縁部は波状となり端部を肥厚する。文様は無文地に２本の平行沈線で右横向きの鋭角を表す。外面は粗いミガキ、内面はケズリの後ナデを施す。胎土に砂が多いが焼成は良好。３は復元口径17㎝。波状口縁を持つ。文様は磨かれた器面に沈線で描かれる。口縁部には２本の平行した沈線を描き、体部は横長楕円の中央に横線の一部が見られる。内面上部はケズリの後粗くミガキが入る。色調は明赤褐色で焼成は良好。４は小型鉢の底部か。底径は７㎝。文様は縄文（ＲＬ）が浅く施文される。５は口縁部破片で、口唇部を薄く仕上げる。口縁に沈線を引き、縄文（ＬＲ）を浅く施文する。造りは粗い。

１～３は無文で波状口縁を持ち、沈線で文様を描出している。器面を磨く手法や、器内面にケズリが施される手法も共通する。これらは後期後葉に位置付けられよう。

石器（６～９）

６は有茎石鏃。茎と両方の逆刺を欠く。石材は黒い縞模様が入る黒曜石である。７は磨石類の半損品である。片面の中央には幅４㎜の浅い筋状の磨痕がみられる。端部は敲石として利用され、敲打痕が残る。８・９は不定形石器に分類される。８は打面の一部に自然面を残す。下端部と右側縁には腹面から一方向に連続的な小剥離が見られる。薄く鋭利な左側縁には使用痕が認められる。石材は頁岩を使用する。９は横長の剥片を素材にして腹面から比較的急角度の連続的な剥離を施し、端部を丸く仕上げる。石材は無斑晶質安山岩を利用する。

６の石鏃は有茎で後期以降の特徴がある。従ってこれらの石器は上述の土器に併行するものと考えられる。

B. 弥生時代後期末から古墳時代前期の遺物（図版1～４、別表３）

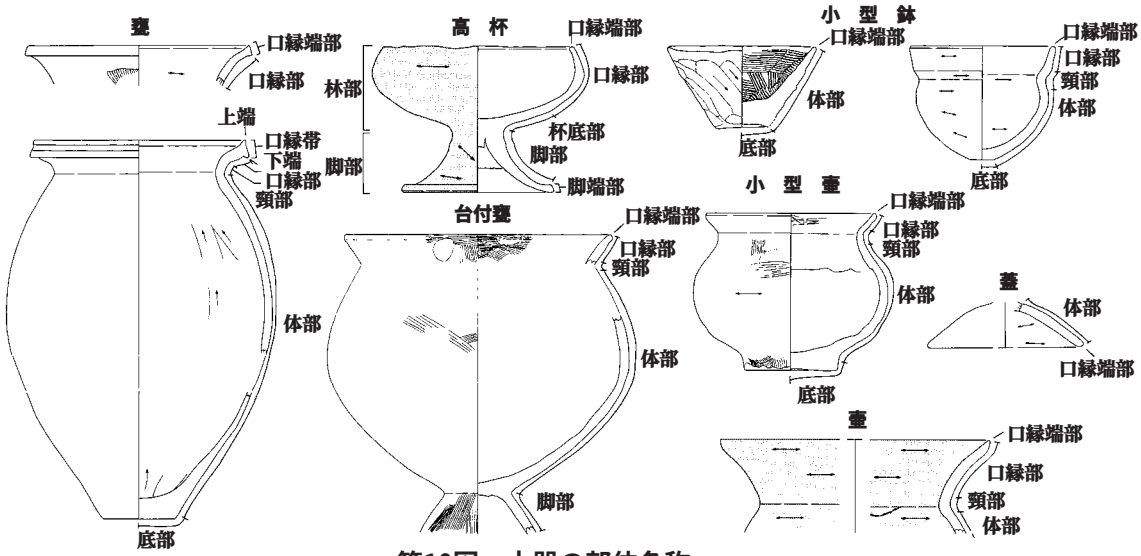
弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺物は土器のみであり、主に南側の沢周辺の４Ｆ・Ｇ、６・７Ｅ・Ｆ・Ｇ、および北側の沢周辺の17・18Hに集中して分布し、その多くがⅡ層中より出土した。器種としては甕形土器・壷形土器・小型壷形土器・高杯形土器・小型鉢形土器・蓋形土器（以下、「形土器」を省略）が確認できる。器種別の出土量を見ると甕が約９割を占め、その他の器種を圧倒している。ここでは器形の把握できる甕46点、壷２点、小型壷１点、高杯２点、小型鉢２点、蓋１点の計54個体を図化した。また、この図化と並行して、胎土の肉眼観察も実施した。その結果、越後の在地系［坂井ほか1983、坂井・横山・山本1983］（以下、在地系とする）・北陸系と中部高地系では色調・混和材などにおいて以下の傾向を示すことを確認した。

在地・北陸系：黄褐色から淡黄褐色を呈する柔らかい胎土である。径２～３㎜の比較的大きな石英や角礫を多く含む。

中部高地系　：橙色から暗茶褐色を呈し、焼成にもよるが概して堅緻である。胎土には径２㎜程度の白色粒子を含む特徴が認められ、この他石英、チャートなどの小礫を含む。

ただし、なかには系統と胎土の一致が見られないものもある。これは北陸系・在地系と中部高地系の分布範囲が重複する頸城地方南部において両系統の交流が進み、相互の器形・文様が影響しあい受容された結果と考えられる。この他、東海系は黒褐色を呈し、微細な白色粒子・雲母を含むこと、畿内系・近江系では黄褐色から暗褐色を呈し、石英・雲母以外の目立った混和材を含まないことなどが観察されたが、いずれも出土量が少なく、傾向を捉えるには至らなかった。

土器の部位名称は各器種ごとに統一した（第10図）。以下、器種毎に記載する。



第10図　土器の部位名称

甕（10～55）

本遺跡出土の甕には在地系（A・B類）・北陸系（C類）・中部高地系（D類）・畿内系（E類）・東海系（F類）・近江系（G類）が認められる。各々の出土量を見ると、在地系が約半数を占め、次いで北陸系、中部高地系が各々在地系の半数存在し、この他東海系、畿内系、近江系が少量混在するといった在り方を示す。ここでは、器形・系統により８大別しアルファベットでA～H類とした。また各類は口縁部の形態により細分でき、これをアラビア数字でアルファベットに続けて表示した。

Ａ類　在地系（10～21）

直線的に伸びる口縁部が上部で外反し逆「コ」の字形を呈するものである。体部最大径が中位から上位に位置する倒卵形や球胴形の体部を持つ。口縁部は口縁帯を持ち上端あるいは下端をつまみ出すＡ1類、口縁端部を面取りし上方へつまみ上げるＡ2類、丸く収めるＡ3類に分類される。口頸部の調整はヨコナデ調整、体部内外面の調整はハケ調整・ナデ調整が主体であり、体部内面のケズリ調整は希である。中には器面の調整が不十分で、頸部内面に体部との接合痕が残存するものがある。

Ａ1類（10～16）　口縁端部のヨコナデ調整により成形された口縁帯の上端あるいは下端をつまみ出すものである。

10～12は口縁帯の上下両端のつまみ出しが顕著である。10は比較的長い口縁部に直立気味の口縁帯を持ち、体部中位に最大径が位置する長胴の器形を呈する。口縁帯外面には擬凹線が施文され、内面はヨコナデ調整である。体部外面は条の細かいハケ調整である。体部内面はケズリ調整後、ナデ調整されている。11は口縁部が短く外反し、直立する口縁帯に擬凹線文を持つ。体部は10同様長胴の器形を示すものと考えられる。上下両端のつまみ出しを行っている。12は口縁部の小片である。外面は頸部のヨコナデ調整後、体部のハケ調整、口縁部のヨコナデ調整を行っている。内面はヨコナデ調整である。混和材が少なく、焼成も良好で堅緻である。

13・14は口縁帯の上下両端をつまみ出しているが、下端の調整はつまんでナデる程度である。13は直立する比較的長い頸部を持ち、口縁帯はやや内側に傾斜している。外面は頸部のヨコナデ調整後、体部のハケ調整を行い、口縁部のヨコナデ調整を行っている。内面はヨコナデ調整である。内外面とも頸部に体部との接合痕が明瞭に残存する。胎土には径２㎜程度の石英粒が多く含まれる。外面全面にスス、炭化物の付着が認められる。14は頸部のヨコナデ調整後、口縁部のヨコナデ調整を行っている。頸部内面には体部との接合痕が残存する。胎土は13と近似する。

15は直立した頸部に短く外反する口縁部を持ち、体部は球胴を呈する。口縁端部は面を持ち、下端をつまみ出しているが、上方へのつまみ出しは僅かである。外面は頸部のヨコナデ調整後、体部のハケ調整、口縁部のヨコナデ調整を行っている。器面で確認できるハケ調整工具の幅は約８㎜を測る。体部内面はハケ調整後丁寧なナデ調整を行っているが、頸部内面に体部との接合痕が残存する。中部高地系の胎土である。

16は口縁部外面の強いヨコナデ調整により口縁帯下端に粘土が押し下げられ、幅広の直立する口縁帯を持つが、口縁帯下端のつまみ出しや調整を行わないものである。体部は中位に最大径が位置する球胴を呈する。体部内外面のハケ調整後、頸部のヨコナデ調整、口縁部のヨコナデ調整を行っている。

Ａ2類（17～20）　口縁端部を面取りし、先端部を上方へつまみ上げるものである。A1類と比較して口頸部の逆「コ」の字形がやや緩やかである。

17・18は頸部のヨコナデ調整後、体部のハケ調整、口縁端部の面取りを行っている。17の器壁は厚さ４㎜と薄い。18・19は頸部のヨコナデ調整後、口縁端部の面取りを行っている。17・18と比較してやや厚手である。20は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部が面取りされるが先端部のつまみ上げを行わないものである。口縁部内外面ともヨコナデ調整である。胎土は中部高地系である。

Ａ3類（21）　口縁部を丸く収めるものである。体部上位に最大径が位置する倒卵形をなし、比較的長い口縁部を持つ。外面は中部高地系の櫛描文の影響を受けたと考えられる波状文を口縁部～体部上半に施文

している。器面で確認できる工具幅は約1.4㎝を測り中部高地系のものより粗大である。体部下半はナデ調整である。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はケズリ調整後、ナデ調整している。17の胎土と近似する。

Ｂ類　在地系（22～31）

口頸部が「く」の字に屈曲し端部を丸く収めているものである。口頸部の屈曲や断面形にはバラエティーがあり、口縁部が短く外反しやや厚みを持つＢ1類、頸部の屈曲が強いＢ2類、頸部が明瞭に屈曲し、口縁部が直線的に伸びるＢ3類、頸部の屈曲が弱いＢ4類に分類される。口頸部の調整はヨコナデ調整、体部内外面の調整はハケ調整、ナデ調整が主体であり、体部内面のケズリ調整は希である。

Ｂ1類（22～24）　口縁部が短く外反し、やや厚みを持つものである。いずれも白色粒子を含み、橙色を呈する中部高地系の胎土に類似する。

22は口縁部から頸部にかけてヨコナデ調整を行った後、体部外面は縦位のハケ調整、内面は頸部から体部にかけて横位のハケ調整を施している。23は口縁部内外面のヨコナデ調整後、体部外面は横位のハケ調整、内面はハケ調整後ヨコナデ調整を施している。体部外面の一部にススが付着している。24は口縁部内外面のヨコナデ調整後、頸部に縦位のハケ調整を施し、口縁部内外面をヘラミガキ調整している。

Ｂ2類（25・26）　頸部の屈曲が強く口縁部が大きく外反するものである。全体的に調整は粗く、頸部と体部の接合部に指頭圧痕が連続する。胎土は粗く、径２㎜程度の小礫を多く含む。

25は口縁部の内外面がヨコナデ調整、体部外面は縦位のハケ調整、内面はケズリ調整後ヨコナデ調整を施している。口縁部外面にススが付着している。26は摩耗が著しく判然としないが、口縁部はヨコナデ調整である。体部外面は不明。内面はナデ調整している。頸部下に接合痕が残存し、この上に指頭圧痕が連続する。

Ｂ3類（27～29）　頸部がくの字に屈曲し、口縁部が直線的に伸びるものである。体部は最大径が中位に位置する球胴を呈する。

27・28は口縁部内面、体部外面のハケ調整、体部内面のヘラナデ調整が共通して認められ、器壁は比較的薄い。27は口縁部外面がヨコナデ調整、内面は横位のハケ調整が残存する。体部外面上半はハケ調整を施している。内面は横位のハケ調整後、ヘラナデ調整を行っている。28は直線的伸びる口縁部が端部で僅かに外反して丸く収められている。口唇部に指頭圧痕が連続する。外面は体部のハケ調整後、口縁部のヨコナデ調整を施す。27同様口縁部に横位のハケ調整を残し、体部はハケ調整後ヘラナデ調整を行っている。中部高地系の胎土と類似する。体部外面にはススが付着する。

29は27・28よりも小形で、調整が全体的に粗い。特に体部内面は粘土紐の積み上げ痕がそのまま残存する。体部外面は斜位のハケ調整後、体部下半のケズリ調整、頸部から口縁部のヨコナデ調整を行っている。内面は斜位のハケ調整後口縁部のヨコナデ調整を行っている。

Ｂ4類（30・31）　頸部の屈曲が弱く、比較的長い口縁部を持つものである。全体的に調整が粗く、器壁はやや厚い。

30は体部外面の斜位のハケ調整後、口縁部のヨコナデ調整を行っている。内面は体部のケズリ調整後、口縁部のヨコナデ調整を行っている。体部外面の一部にススが付着する。31は胎土が粗く、径５㎜程度の大きな礫を含む。口縁部内外面はヨコナデ調整を行っているが、礫を含むためか全体的に粗くなっている。

Ｃ類（32～40）

北陸系の有段口縁を持つものである。口縁部に擬凹線文を施すＣ1類、ヨコナデ調整のみで擬凹線を欠

くＣ2類、口縁部下端を肥厚することにより有段口縁状をなすＣ3類に分類される。

Ｃ1類（32～34）　有段口縁に擬凹線文を施すものである。

32はほぼ完形である。直立する口縁部外面に３条の擬凹線が施文され、端部は丸く納められている。体部は最大径が中位にくる倒卵形を呈する。頸部のヨコナデ調整後、体部内外面のハケ調整を行っている。外面および内面体部下半に炭化物やススの付着が認められる。33・34は口縁部から頸部までの小片である。口縁部は外傾し、先端部の厚みが薄くやや尖り気味である。33は口縁部外面に幅1.5～2.5㎜の擬凹線が４条施文され、口縁部内面、頸部ともヨコナデ調整されている。34は口縁部外面に幅１～２㎜の擬凹線が８条施され、頸部は強くヨコナデ調整される。内面はヨコナデ調整である。擬凹線施文後に口縁部を指で押さえたと見られる指頭圧痕が残存する。外面の一部にススの付着が認められる。

Ｃ2類（35～39）　ヨコナデ調整のみで擬凹線文を欠く有段口縁である。口縁端部の断面形が尖り気味になるもの（35）と、丸く収めるもの（36～39）がある。

35は口縁部外面のヨコナデ調整後、頸部と口縁部内面のヨコナデ調整を行っている。内外面にススが付着する。36の外面は頸部のヨコナデ調整後、口縁部のヨコナデ調整、体部のハケ調整を行っている。外面全体にススが付着する。37は口縁端部付近で僅かに屈曲する。内外面ともにヨコナデ調整である。

38・39は35～37と比較して口縁部内面の屈曲が曖昧となり、口縁端部が厚みを持って丸く収められている。38は体部最大径が上位に位置する倒卵形を示す。外面は口頸部のヨコナデ調整後、体部のハケ調整を行っている。内面は横位のハケ調整後、口縁部をヨコナデ調整している。体部に黒斑が認められる。39は口縁部がやや短く直立気味である。外面はヨコナデ調整、内面は横位のハケ調整後、ヨコナデ調整している。

Ｃ3類（40）　口縁部下端を肥厚することにより有段口縁状をなすものである。頸部のヨコナデ調整後に行う口縁部のヨコナデ調整の際、粘土を押し下げることにより口縁部下端を肥厚している。体部外面はハケ調整、内面は丁寧にヨコナデ調整されているが、頸部に体部との接合痕が残存する。

Ｄ類　中部高地系（41～46）

中部高地系あるいはその影響を受けた器形および櫛描文施文が認められるものである。平底で最大径が上位に位置する体部を持つものが多い。内面の調整はすべて横位のヘラミガキ調整である。口縁部形態は直立気味に伸び上部で外反するＤ1類、口縁上部が屈曲し、受け口状を呈するＤ2類、口縁部外面に粘土紐を貼り付け折り返し口縁状をなすＤ3類に分類される。

Ｄ1類（41・42・44）　直立気味に伸び上部で緩やかに外反する口縁部を持つものである。

41は中部高地系の櫛描文が施文されているものの、頸部の屈曲が明瞭で、体部の球胴化が進んでおり、器形に北陸系の影響が認められる。櫛描文は体部の波状文→頸部の廉状文→口縁部の波状文の順に施文されている。幅約１㎝の施文工具を使用し、土器を左回りに回転させて施文している。内面は丁寧な横位のヘラミガキ調整が行われている。42は口縁部片のみである。外面は縦位のハケ調整後、土器を左回りに回転させて櫛描波状文を施文しているが、41と比較して施文密度は低く、縦位のハケ調整が残存する。44は口縁部が短く外反し、櫛描文が施文されていないものであり、41の胎土と近似する。外面は器面の摩耗が進んでいるが、体部外面は縦位のヘラミガキ調整、内面は横位のヘラミガキ調整が行われている。

Ｄ2類（43）　口縁部は直立気味に伸び、口縁上部でやや内側に屈曲する受け口状を呈する。外面はヨコナデ調整後、口縁部に１条、頸部に３条の櫛描波状文が施文されている。この波状文は直線的で波の頂部が山形をなす。内面は摩耗が著しく調整は不明。

Ｄ3類（45）　口縁上部の外面に粘土帯を貼り付けた複合口縁をなす。外面は縦位のハケ調整後、幅約８㎜の施文工具を使用して櫛描波状文を施文している。内面は丁寧な横位のヘラミガキ調整を行っている。

46は肩部の小破片であるため類型は不明である。頸部には櫛描波状文、肩部にはＬＲの斜縄文が施文される。体部内面はＤ1～3類同様横位のヘラミガキ調整である。

Ｅ類　畿内系（47・48）

体部外面にタタキ調整が認められる畿内系の甕である。

47は口頸部が「く」の字に屈曲し直線的に外傾する口縁部を持ち、体部中位に最大径が位置するものと考えられる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整し、端部をつまみ上げて小さな立ち上がりを付けている。体部外面は左上がりのタタキ調整である。体部内面のケズリ調整により器壁は平均2.5～3㎜と薄く仕上げられている。胎土に径２㎜以下の石英粒を多量に含む。一方、48は口縁部内外面をヨコナデ調整し、体部外面は上半部をタタキ調整している。体部内面は丁寧なヘラナデ調整を行っている。器壁は平均５㎜と厚く、中部高地系の胎土と類似する。庄内形甕に特徴的な体部外面のタタキ調整以外の器形・調整との共通点は少なく、畿内系の影響を受け、畿内以外の地域で製作されたものと考えられる。

Ｆ類　東海系（49～53）

口縁部が「く」の字状あるいは「Ｓ」字状をなす、東海系の台付甕である。全体の形態が分かるものは少ない。口縁部が「く」の字状のものをＦ1類、「Ｓ」字状のものをＦ2類とする。

Ｆ1類（49・50）　口縁部が「く」の字に外反し、体部最大径が上位に位置する器形を示す。

49は口縁部内外面がハケ調整、体部外面が下半部では縦位、上半部では左上がりあるいは横位にハケ調整を行っている。内面はナデ調整である。脚部は内外面とも縦位のハケ調整である。50の外面は口縁部のナデ調整後、頸部から体部にかけて縦位のハケ調整を行っている。口縁部内面はハケ調整後ヨコナデ調整を行っている。調整は粗く、頸部内面には体部との接合痕が残存する。

Ｆ2類（51・52）　いわゆる「Ｓ字状口縁台付甕形土器」（以下、Ｓ字甕とする）である。

51は復元口径10㎝と考えられる小形品である。体部外面は条が７本／10㎜を測る鋭いハケ調整後、改めて頸部のヨコナデ調整を行っている。内面はナデ調整である。器壁は肩部で３㎜と薄い。胎土は黒褐色を呈し、白色微粒子や雲母を含む。これに対し52はハケ目の条が７本／16㎜と粗く、器壁も全体的に厚い。外面は左下がりの断続的なハケ調整後、回転台を使用したと考えられる横位のハケ調整を行っている。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面は目立ったナデ調整を加えておらず指頭圧痕が残る。

53は台付甕の脚部である。口縁部から体部が残存していないためどちらの類型に属するかは不明である。外面は縦位のハケ調整、内面はナデ調整である。脚部端部は平らな面を持つ。

Ｇ類　近江系（54）

口縁部が受け口状を呈する近江系の甕である。外面は細かいハケ調整、口縁の直立している部分はヨコナデ調整である。口縁部外面のハケ調整と同様の工具を使用し、器面に対して右斜め手前から連続して刺突を加えている。

Ｈ類　系統不明（55）

口縁部が頸部で稜を持たずに水平に反り返り、あまり張らない体部を持つと考えられるものであるが、系譜については不明である。外面はヨコナデ調整後、体部に縦位のヘラミガキ調整を行っている。内面は口縁から頸部にかけてが横位、体部が縦位のヘラミガキ調整を行っている。

壷（56・57）

56は口縁部が外反し体部下半に最大径が位置する壷の口頸部であり、中部高地の箱清水式系土器にその系譜を求めることができる。内外面とも赤色塗彩後、横位のヘラミガキ調整が丁寧に行われている。内面の頸部下には体部との接合痕が残存する。57は壷の頸部片である。外面は縦位のハケ調整後ヨコナデ調整、内面は横位のヘラミガキ調整である。

小型壷（58）

58はやや偏平な球形の体部に短く外反する口縁部を持つ小型壷である。外面は縦位のハケ調整後、赤色塗彩し、横位のヘラミガキ調整を行っている。内面は横位のハケ調整後、ヨコナデ調整している。

高杯（59・60）

59は体部中位から内彎する杯部に、ラッパ状に開く脚部を持つ。外面は赤色塗彩後、杯部外面では横位に、脚部外面では縦位にヘラミガキ調整される。杯部内面はハケ調整後、ミガキ調整される。脚部内面はナデ調整されるが、粘土紐の接合痕が残存する。60は高杯の杯部である。平坦な杯底部に直線的に伸びる口縁部を持つ器形である。底部外面は縦位にヘラミガキ調整、杯部外面ではハケ調整後、横位のヘラミガキ調整を施している。内面はハケ調整後、丁寧な横位のヘラミガキ調整が施される。脚部と杯部は粘土塊を中央に押し込むことにより接合している。杯部下半に黒斑がある。

小型鉢（61・62）

61は有段口縁を持ち、丸い体部に底径1.5㎝の小さな底部を持つ小型鉢である。内外面とも丁寧な横位のヘラミガキ調整が施されている。62は手づくね成形による小型の鉢である。外面は底部を上にし、口縁部から底部に向かってケズリあげている。内面は底部から口縁部に向かって左回りでハケ調整を施している。

蓋（63）

63はやや内彎して伸びる体部を持つが、つまみの有無は不明である。外面はヨコナデ調整され、内面は横位のヘラミガキ調整が施される。胎土に径４㎜程の比較的大きな石英粒を多く含む。

C. 奈良・平安時代の遺物（図版４、別表４）

奈良・平安時代の遺物は少なく、実測・図化したものは11点である。出土場所は須恵器（64・65）は調査区の南側４G、土師器の杯・甕（66～73）は北側の17～19H・Ｉにまとまる。

（１）奈良時代の遺物

該期の土器は僅かで、須恵器の杯３個体分と蓋１個体分の破片が４Gで検出された。

有台杯（64・65）　64は口径15.2㎝、器高4.1㎝と口径に対し高さが低い。口縁部が少し外反し体部下半は若干丸みを持つ。底部には左回転のロクロケズリが施され、底部外周に低い高台が付けられる。高台の断面は略方形で貼り付け後ロクロナデを施す。高台は小さく、底部外周に貼り付けられるために底部の中央は高台接地面よりも突出する。胎土には砂が多く径５㎜以上の礫も含まれるが焼成は硬い。65は復元口径14.6㎝、器高4.2㎝を測り64とほぼ同規格である。成形・底部調整とも同様であるが、高台は外にふんばるように貼り付けられる。高台貼り付け後のロクロナデ調整や器内面に着いた胎土片など調整は全体に粗い。器外面が黒灰色に変色している部分があることから、伏せた状態で焼成されている。この他、図示していない１点についても高台の作り、胎土など類似している。

以上、３点は規格・胎土・高台の位置・調整などから同時期、同手法による製品と考えられる。

蓋（未図化）　器形復元できなかったため図化していない。つまみは偏平で大きく（直径3.6㎝）中央はあまり尖らない。器高がやや高く縁部はわずかに高くなり、端部は斜め下方に短く屈曲する。縁部には焼き歪みが見られる。天井部はロクロケズリされ、縁部と内面はナデられている。胎土には５㎜大の礫を含み、色調は暗灰色で焼成は堅緻である。大きさから、前述の有台杯と組み合わされるものであろう。

（２）平安時代の遺物

平安時代の土器は18・19H・ⅠのⅡ層中に集中して分布していた。土器の量は平箱に１箱であり土師器がほぼ大半を占める。須恵器は２点のみである。資料数に恵まれないが、器種毎に概要を記す。

須恵器（未図化）

２点出土しているが、いずれも小片であるため図化していない。１点は17H20のⅡ層中から出土した無台杯の口縁部片である。器壁は薄く外傾する。時期は９世紀後半と考えられる。この他に体部にカキ目を施す瓶類の小片が出土している。

土師器（66～73）

今回確認できた器種は杯と甕である。

杯（66～68）

図示した遺物以外には細片を集めても、数個体程である。有台椀と無台杯が見られ、どちらにも内面黒色処理されたものが認められるが多くない。底部は糸切り未調整である。また、口縁端部を丸みをもって外反させた、器形のやや異なる椀の小片も出土している。

66は口径12.6㎝、底径5.5㎝、高さ3.8㎝。底部は小さく体部は内彎して立ち上がる。底部は回転糸切りで、内外面ともナデられる。焼成は悪く軟質で器面の保存は悪い。67は口径11.4㎝、底径3.6㎝、復元高2.6㎝。底部と口縁部片から器形を復元しているので詳細は知り得ないが、やや浅く開く器形を持ち器壁は薄い。回転糸切り後、底部の一部を簡単にナデる。器面には胎土に含まれた有機物が消滅した痕の小孔が見られる。焼成は良好である。68は小皿とも呼ぶべきものである。小片からの復元値は口径12.0㎝、底径3.6㎝ 、器高2.6㎝で小さな底部から体部に直線的に開く。胎土には橙色の粘土粒が特徴的に含まれる。器面の風化は進むが焼成は比較的良い。

甕（69～72）

甕は大型で体部が砲弾型の北信型甕［笹沢1988］と小型甕がある。両者ともロクロ成形である。

北信型甕（69～71）

ここでは３点を図化した。いずれも口縁部破片で全体を図化できる資料はない。体部下半は器外面をヘラケズリし、内面はハケ調整あるいはナデが施される。色調は赤褐色から鈍い赤褐色を呈す。

69は口径23.0㎝。頸部で「く」の字状に緩く括れ、口縁部は若干外傾し端部を丸める。口縁部を肥厚させ下半から頸部に段を持つ。内外面ともロクロナデが施され、さらに内面にはカキ目が見られる。70は口径21.0㎝。口縁部は69より肥厚せず、頸部の段も目立たない。器面はロクロナデ、体部内面にはカキ目が見られる。胎土に８㎜大の礫を含み、焼成はやや甘く、遺存状態がが悪い。71は口径21.5㎝。口縁部は肥厚し頸部に段を持つ。胎土にはやはり礫を含むが、焼成は堅緻である。

小型甕（72）

胎土と成形によって２分類できる。一つは器壁が比較的厚く、大きめの砂が多く入り、赤茶色を呈す。底部は回転糸切りと切り離し後のヘラケズリ調整があり、いずれも底径７㎝前後を測る。一方はこれも小破片ではあるが器形は頸部で強く屈曲し、口縁は内彎気味に立ち上がる。胎土には細砂を含み淡赤橙色を

呈す。器壁は約３㎜で丁寧なロクロナデを施す。復元口径は12.5㎝、底部はヘラケズリされている。

甑（73）

偏平な把手が付く体部の一部と考えられる。器外面はナデ調整、内面は横方向のハケ目がみられる。

施釉陶器（74）

灰釉陶器は１点のみの出土である。74は底部の小破片で径などの復元は難しい。比較的細長い高台を持ち、端部を細める。器壁は厚く、見込みにも釉がかかる。底部の糸切りは見えない。

４．まとめ

A. 弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について

大洞原Ｃ遺跡では、越後の在地系土器に伴い、北陸・東海・中部高地・近畿・近江地方といった様々な地域の外来系土器が存在する。特に北陸・中部高地系は地理的に近接するため、外来系土器の中でも主体を占める。ここでは、これら各系統の様相を概観し、既存の編年案との対応を検討する。

在地系土器　10は口縁部が長く伸び口縁帯外面に擬凹線が巡り、体部中位に最大径を持つなで肩の器形を示す。これは糸魚川市後生山遺跡第３号住居出土の甕［木島1986］に類似する。また、11は口縁部が短く屈曲し、やはり口縁帯に擬凹線が巡る。これは新潟市六地山遺跡出土の甕［寺村1956］に類例を求めることができる。以上のことから、この２点は弥生時代後期中葉に遡るものと考えられる。

これ以外の遺物は、越後の在地系の甕［坂井ほか1983、坂井・横山・山本1983］の特色をよく示したものが多く、おおむね新潟シンポ編年［坂井・川村1993、川村1993ｂ］の５・６期に位置付けられ、若干前後の時期を含むものと考えられる。

北陸系土器　有段口縁を持つ月影式系の甕は、時期が下るにつれ口縁部が先細りに外反する傾向があり、40のように口縁帯外面を肥厚することにより有段部を作出するものが認められるようになる。また61の有段口縁を有する小型鉢は石川県小松市漆町遺跡の鉢Ｇ1類［田嶋1986］に類似し、漆町編年［田嶋前掲］では６群から認められる。よって遺物の時期は、漆町編年の５・６群を主体とするものと考えられる。

中部高地系土器　41は口縁部・体部に櫛描波状文、頸部に櫛描廉状文を密に施文しているが、器形は体部の球胴化が進み、口頸部が「く」の字に屈曲している。これは、北陸系の土器が中部高地の箱清水式系土器に受容された結果と考えられる。このような折衷土器は、長野県中野市七瀬遺跡の段階区分［赤塩1994］では第３段階に顕在化する。七瀬遺跡の第３段階は、北陸の漆町編年に照らすと５・６群に対応する。これは越後の在地系土器、および北陸系土器の主体とする時期にほぼ並行する。

46は、１個体に櫛描波状文とＬＲ縄文が施文される文様の折衷が認められる。この時期、縄文の施文は上野以東の関東地方に多く、46の体部に施文された縄文もその影響を受けたものと考えられる。これと折衷する櫛描文は上野地方の樽式系なのか箱清水式系なのか判別できないが、本遺跡の位置する頸城地方南部が中部高地を経由して上野以東の関東地方と通じていたことが推測される。

畿内・近江系土器　47は直線的に伸びる口縁部、口縁部先端のつまみ上げ、体部外面の左上がりのタタキ調整、内面のケズリ調整、器壁の厚さ（2.5～3.0㎜）などの特徴から、県内では初例となる庄内形甕［寺沢1986］である。庄内形甕は生駒山西麓製の本来の庄内式甕の存在を重視し、庄内河内形甕と庄内大和形甕に大別されており［寺沢前掲］、この分類に照らせば47は口縁部の形態や左上がりのタタキ調整、器壁

の薄さから庄内大和形甕に分類される。推定口径は12.4㎝を測り、庄内大和形甕の中でも小形のものである。胎土が越後の在地系や中部高地系のそれと異なることから搬入品の可能性が高い。遺物の時期は、以上の特徴から寺沢編年［寺沢前掲］の庄内２式期に位置付けられると考えられる。

これまでに県内で確認されたタタキ調整の認められる甕は、長岡市横山遺跡の２例［駒形1987］、西蒲原郡黒埼町緒立Ｃ遺跡の１例［渡辺1994］がある。

東海系土器　51・52は口縁端部を欠くものの、口縁部の形態および調整手法からＳ字甕Ｂ類［赤塚1986］に分類されると考えられる。51は胎土が在地系や中部高地系と異なり、黒褐色を呈し微細な白色粒子・雲母を含むこと、体部外面のハケ目が鋭く切れ込んでいることから搬入品と考えられる。しかし52はハケ目の状態、胎土とも51と異なり、製作地の違いが推測される。この２点は、Ｂ類に分類できることから廻間Ⅱ式期に所属すると考えられる。

これまでに検出されたＳ字甕の出土例を見ると、新井市斐太遺跡群上ノ平24号住［駒井・吉田1962］１例（Ａ類）、中頚城郡中郷村籠峰遺跡［川村1988］２例（Ｂ類１、Ｃ類１）、同中郷村横引遺跡［立木1996］２例（口縁部欠き不明）、三島郡西山町高塩Ｂ遺跡［坂井ほか1983］２例（Ｂ類）、西蒲原郡黒埼町緒立Ｃ遺跡［渡辺前掲］２例（Ｂ類）があり、Ｂ類が最も多い。Ｓ字甕Ｂ類の盛行する廻間Ⅱ式期は東海系土器が東日本各地に大量に移動する時期である。赤塚氏はこの拡散現象を畿内と東海の文化が接触する地域での極度の緊張状態に起因する難民の排出と説明している［赤塚1992］。前述の畿内・近江系土器はこの東海系土器の拡散にともなって当地にもたらされたものと考えられる。

大洞原Ｃ遺跡出土資料の編年的位置付け

以上、在地系・外来系土器の検討から、本遺跡出土遺物と既存の編年案との対応は、おおむね新潟シンポ編年の５・６期、漆町編年では５・６群、中部高地北部に位置する長野県中野市七瀬遺跡の段階区分では第３段階に対応し、前後の時期を若干含むものと考えられる。また、これらの年代と前述の庄内大和形甕（＝庄内２式期）やＳ字甕（＝廻間Ⅱ式期）の所属時期との並行関係は矛盾しない。

本遺跡の所在する頸城地方南部は在地系、北陸系および中部高地系土器の分布が重複する地域である。前述のとおり、在地・北陸系と中部高地系では、胎土と系統の交錯や折衷土器が認められ、相互に器形や文様へ影響を及ぼすほど、受容が進んでいたものと考えられる。

一方、東海・畿内・近江系土器はあくまでも客体的存在である。東海系土器は廻間Ⅱ式期初頭に起こった第一次拡散［赤塚1990］を契機に越後へも波及し、この際、畿内・近江系土器を伴って来たと考えられる。本遺跡出土遺物の所属時期はこの第一次拡散の時期と重複する。

以上のことから、大洞原Ｃ遺跡の位置する妙高山東麓は東海地方から北陸地方へ通じるルートの一つであり、このルート上に位置する本遺跡は近隣地域との交流を深めながら、第一次拡散により波及した遠隔地の土器も積極的に取り入れていたことが窺える。

大洞原Ｃ遺跡の北側約500ｍに近接する小野沢西遺跡では、本遺跡の所属時期と前後する畿内Ⅴ様式系や布留式系の甕が出土している［武田1996］。また、中郷村横引遺跡［立木前掲］でも布留式系の甕が出土している。今後これら相互の関係を検討することにより、空白地域であった妙高山東麓の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器様相が明かとなり、周辺地域との関係も解明されるものと期待される。

B. 奈良・平安時代の土器について

（１）奈良時代

本遺跡の須恵器杯に類似するものは頸城地方の山麓部（Ⅱ章２歴史的環境）ではほとんど検出されていないが、平野部に位置する新井市栗原遺跡ＳＤ25出土の杯ⅡＢ［坂井1982］に類例を求めることができる。同類は口径14.3～15.0㎝、器高4.2～5.0㎝で本遺跡例もその範囲に収まり、底部外周に高台をつける手法や底部に丸みを持ち安定感に乏しいなどの特徴が共通する。栗原遺跡例の胎土には白色砂粒が目立って多く、色調も異なることから生産地の違いが推測される。栗原遺跡の資料については８世紀代前半とされていることから、本遺跡出土資料も８世紀前葉（奈良時代初期）の所産と考えられる。蓋も同時期のものと考えられる。

（２）平安時代

平安時代の出土土器は少量であり、確認できる器種は椀・杯類、甕のみであるが、周辺の遺跡の状況と併せて出土土器の時期を考えたい。

長野県方面では土師器椀に黒色処理を行う比率が高いが、本遺跡では図化していない資料も含め、恐らく半分に満たないと推測される。一方長甕を見ると、口縁端部が内屈する越後型甕［笹沢1988］は検出されず、口縁端部を丸く収め、体部下半をケズリ調整する北信型甕が主体となっている。また、越後型甕とセットで捉えられている小型甕（72）も１点であるが確認されている。周辺の遺跡の新井市杉明遺跡［高橋1989］、妙高村柳平遺跡［小池1996ｂ］の甕の比率は、北信型甕が越後型甕を凌ぎ主体となっており、本遺跡と同様の在り方を示している。

以上の例から頸城地方南部の土師器は、①大型の土師器甕は北信系の影響を強く受ける、②北陸地方から越後に見られる糸切り底を持つ小型甕が一定量存在する、③椀に対する黒色処理が積極的に行われない、という在り方を窺うことができる。

各遺跡の北信型甕の年代を見ると、杉明遺跡のＳＸ１出土遺物は伴出した灰釉陶器（大原２号窯式期）から10世紀前半、柳平遺跡では９世紀後半から10世紀初頭としている。また本遺跡出土の74の灰釉陶器は小片であるが、高台形態から美濃・大原２号窯式期、つまり10世紀前半［斉藤1994］に位置付けられるものと考えられる。以上のことから本遺跡の土師器は先述の遺跡例や出土した灰釉陶器から、９世紀末から10世紀前半に位置付けられると考える。

要　約

1. 大洞原Ｃ遺跡は、新潟県の南西部、中頸城郡大字坂口新田字山谷地に所在する。遺跡は妙高山麓の北東側緩斜面上に立地し、標高は440～450mを測る。現状は宅地、休耕田、山林であった。
2. 調査は上信越自動車道建設に伴い、平成７年に実施した。調査範囲は高速道路の法線内であり、調査面積は11,580㎡である。遺跡の範囲は法線内にとどまらず、隣接するキノコ峯遺跡等と共に一連の遺跡を形成しているものと考えられる。
3. 調査の結果、奈良・平安時代、弥生時代後期末～古墳時代前期、縄文時代後期の遺物を検出した。主体となる時期は弥生時代後期末～古墳時代前期である。遺物の多くが大田切川火砕流堆積物(約4,200年前)上部のⅡ・Ⅲ層から出土した。今回の調査では、遺構は検出されなかった。
4. 以下に各時代の調査成果を要約する。

　縄文時代の遺物は、土器・石器とも後期の所産と考えられる。

　弥生時代後期末～古墳時代前期は、本遺跡の主体となる時期である。在地系土器のほか、北陸系・中部高地系・東海系・畿内系・近江系の土器が認められる。中部高地系では北陸・在地系との折衷土器が存在し、各系統の分布範囲が重複する地理的環境を反映しているものと考えられる。これに対し、東海・畿内・近江系の土器は、畿内周辺の極度な緊張状態に起因する東海系土器の拡散に伴うものと考えられる。これらの遺物を供給する集落は法線外に存在するものと推測される。

　奈良時代の遺物は須恵器３点のみの出土である。山麓部での検出例は少なく、平野部では新井市栗原遺跡に類例を求めることができる。いずれも８世紀前葉に位置づけられるものと考えられる。

　平安時代の遺物は、土師器と灰釉陶器が出土している。土師器は大型の北信型甕と糸切り底の小型甕が見られ、長野県北部に共通した特徴が認められる。しかし、杯・椀類の黒色処理は積極的に行われていない。周辺の遺跡出土資料との比較から、遺物の年代は９世紀末から10世紀前半に位置付けられると考えられる。

引用・参考文献

赤塩　仁　　1994　「第Ｖ章成果と課題　第７節２まとめとして－いわゆる庄内併行期の土器様相」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』栗林遺跡・七瀬遺跡（財）長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　　1986　「Ｓ字甕」覚書95 ’」『年報』昭和60年度　（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　　1990　「Ｖ考察　１廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第10集（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　　1992　「東海系のトレース　－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』６　Ｖｏｌ.44（財）古代学協会

阿部雄生　　1995　「中ノ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

甘粕　健　　1986　「群集墳の展開」『新潟県史』通史編１原始・古代　新潟県

新井市教育委員会　　1995　「高柳遺跡群」（現地説明会資料）　新井市教育委員会

荒川隆史　　1995　「和泉Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

宇賀神誠司　　1993　「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２（財）長野県埋蔵文化財センター

大滝良夫・小池義人　　1996　「第　章　柳平遺跡　3遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ｉ』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第74集　柳平遺跡　新潟県教育委員会

小田由美子　　1993　「東浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

角川日本地名大辞典編さん委員会　1989　『新潟県地名大事典』　角川書店

鎌田元一　　1984　「日本の人口について」『木簡研究』６

川村浩司　　1988　「新潟県籠峰遺跡出土の外来系土師器３例」『新潟考古学談話会会報』第１号新潟考古学談話会

川村浩司　　1993ａ「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』 第２号新潟大学環日本海地域比較史研究

川村浩司　　1993ｂ「北陸北東部の古墳出現前後の様相」日本考古学協会1993年度新潟大会　シンポジウム２『東日本における古墳出現過程の再検討』　日本考古学協会新潟大会実行委員会

木島　勉　　1986　『後生山遺跡－新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報－』糸魚川市埋蔵文化財報告第13輯

駒井和愛・吉田章一郎　1962　『斐太』　慶友社

駒形敏朗ほか　1987　『横山遺跡』　長岡市教育委員会

小池義人　　1996ａ「関川谷内Ｂ遺跡」『第３回　遺跡が語る越後のむかし』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　　1996ｂ「第Ⅵ章まとめ３柳平遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ｉ』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第74集　柳平遺跡　新潟県教育委員会

小島幸雄　　1984　『本長者原廃寺確認調査概要』　上越市教育委員会

小島幸雄　　1989　『下馬場古窯跡群確認調査報告書（市内遺跡群発掘調査事業）』　上越市教育委員会駒井和愛・吉田章一郎　1962　『斐太』　慶友社

斉藤孝正　　1994　「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東３施釉陶器』

坂井秀弥　　1982　『栗原遺跡（第４次・第５次調査概報）』新潟県教育委員会・新井市教育委員会

坂井秀弥ほか　1983　『高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』　西山町教育委員会

坂井秀弥・横山勝栄・山本肇　1983　『内越遺跡』　国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1985　「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17
坂井秀弥　1993ａ「長野県飯山市の平安期佐渡産須恵器・越後系土師器」『北陸古代土器研究』第３号北陸古代土器研究会
坂井秀弥　1993ｂ「古代越後の環境・生産力・特性」　『新潟考古談話会会報　第12号』 新潟考古談話会
坂井秀弥・川村浩司　1993「古墳出現前後における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成２年度　文部省科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書
坂井秀弥　1995　「越後・佐渡」　『全国古墳編年集成』　雄山閣出版
笹沢正史　1995　「信・越両地域にまたがるロクロ土師器甕の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号　新潟考古学談話会
笹沢　浩　1988　「古代の土器」『長野県史』考古資料編　遺構・遺物　長野県史刊行会
沢田吾一　1972　『復刻　奈良時代民制経済の数的研究』　柏書房
上越市教育委員会　1993　『市内遺跡確認調査概要報告書』
高橋　勉　1984　『昭和59年度　新井市遺跡調査報告書　上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1985　『月岡遺跡　範囲確認緊急調査報告書』　新井市教育委員会
高橋　勉　1989　『杉明遺跡』　新潟県新井市教育委員会
高橋　勉　1993　『平成４年度　新井市遺跡確認調査報告書　杉明遺跡・姫川原地区・猿橋城跡・宮ノ本遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1996　「頸城地方の官衙遺跡」『第22回　古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
滝沢規朗　1995　「古墳出現期における集落の動向ー越後の集落を考える上での基礎整理としてー」『研究紀要』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗　1994　「新井市斐太遺跡群の出土土器について」　『新潟考古　第５号』 新潟県考古学会
武田孝昭　1996　「小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団』平成７年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
田嶋明人ほか1986　『漆町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
立木由理子　1996　「第Ⅲ章横引遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　新潟県教育委員会
寺沢　薫ほか1986　『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊
寺村光晴　1956　「越後六地山遺跡」『上代文化』30　國學院大学考古学会
中川成夫・岡本　勇　1961　『新潟県考古遺跡要覧Ⅱ－上越考古篇－』　新潟県教育委員会
中郷村教育委員会　1987　『篭峰遺跡発掘調査概報』
新潟県　1981　『新潟県史』資料編２　原始・古代二　文献編
新潟県教育委員会　1991　『新潟県歴史の道調査報告書第二集　北国街道Ⅰ』
秦　繁治　1990　『岡嶺遺跡－発掘調査報告書－』　清里村教育委員会
早津賢二　1985　「妙高火山－赤倉火砕流の１４C年代」　『道添遺跡Ⅱ』 妙高村教育委員会
早津賢二　1985　「妙高火山群」　第一法規出版
早津賢二　1986　「妙高高原の大地」『妙高高原町史』　妙高高原町
早津賢二　1994　「新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として」『地学雑誌』vol. 103 地学協会
麻柄一志　1983　「北陸の高地性集落とその評価」『富山市考古資料館紀要』 第二号
宮腰公健　1977　「梨ノ木古墳群」『新井市の古墳群　新潟県新井市古墳群詳細分布調査報告書』新井市教育委員会
妙高村史編さん委員会　1994　『妙高村史』　妙高村
渡辺ますみ　1994　『緒立Ｃ遺跡発掘調査報告書』　黒埼町教育委員会

別表：遺物観察表

凡　例

器　　種　本文参照

遺　存　度　残存部位と比率を表す。極小片の場合は「一部」と表す。ただし、「欠」とあるものは欠損部位を表す。

法　　量　口：口径　底：底径　高：高さ　頸：頸部径　長：長さ　厚さ：厚　重：重量
（）内の数値は復元値。

成形・施文・調整　成形・施文・調整の手法およびその部位を記す。A→BはA調整後B調整を行ったことを表す。
口：口縁部　頸：頸部　体：体部　杯：杯部　脚：脚部　底：底部　外：外面
内：内面

色　　調　『新版　標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に従い土色名を記す。

胎　　土　石：石英　雲：雲母　角：角閃石　チ：チャート　白：白色粒子　海：海綿骨針
胎土に含まれる混和材を主に記載する。含有量は「多」、「少」で表す。

備　　考　スス：煤　炭：炭化物　赤：赤色塗彩

別表１　縄文時代土器観察表

No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	法量(cm)	施　文・調　整	胎　土	色　調	備　　考
1	深鉢形土器	11E18	Ⅱ	口1/4	口(28.0)	口沈線１条 内外ミガキ	石・角少	外明褐 内黒	穿孔３カ所
2	深鉢形土器	8F20	Ⅱ	口1/8	口(15.0)	体沈線施文→ミガキ 内ケズリ→ミガキ	石・雲・ 角・白	橙	
3	深鉢形土器	9F11	Ⅱ	一部		外ミガキ→沈線施文 内ケズリ→ミガキ	角多・白	明赤褐	
4	深鉢形土器	11E16	Ⅱ	底1/2	底 7.0	体ＲＬ縄文	石多	にぶい黄橙	
5	深鉢形土器	11E23	Ⅱ	一部		口沈線１条 体ＬＲ縄文	石・雲	にぶい黄橙	

別表２　縄文時代石器観察表

※計測値は最大値である。

No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
6	石鏃	18F17	Ⅱ	茎と逆刺し欠	22.4	16.4	5.1	1.53	黒曜石	
7	磨石？	7F3	Ⅱ	1/2	56.0	52.0	29.0	100.0	硬砂岩	
8	不定形石器	4G11	Ⅱ	完形	47.6	55.0		42.52	頁岩	
9	不定形石器	4F23	Ⅱ	1/2？	27.6	34.4	11.0	9.94	無斑晶質安山岩	基部折断

別表３　弥生時代後期末から古墳時代前期土器観察表

No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	法量(cm)	成　形・調　整	焼成	胎　土	色　調	備　　考
10	甕Ａ	7H1	Ⅱ	3/5	口14.0 底 4.5	外：口擬凹線文、体ハケ 内：ケズリ→ナデ	良	石・チ少	浅黄橙	
11	甕Ａ	6F10	Ⅱ	口1/2	口12.8	外：口擬凹線文、頸ナデ 内：口ハケ	良	石・雲・チ	灰黄褐	
12	甕Ａ	7E21	Ⅱ	口一部		外：口頸ヨコナデ→体ハケ 内：口ヨコナデ	堅緻	雲少・白	にぶい橙	
13	甕Ａ	6E	Ⅱ	口1/3	口15.2	外：頸ナデ→体ハケ・口ヨコナデ 内：ヨコナデ	良	石多・チ・ 雲	にぶい橙	体外炭
14	甕Ａ	18H18	Ⅱ	口1/6	口17.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	良	石多・チ・ 雲	にぶい橙	外スス
15	甕Ａ	6G5	Ⅱ	1/6	口12.2	外：頸ヨコナデ→体ハケ・口ヨコナデ 内：ハケ→ナデ	堅緻	石・白	にぶい赤褐	体外スス

No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	法量(cm)	成　形・調　整	焼成	胎　土	色　調	備　　考
16	甕A	6E	Ⅱ	口1/6	口19.2	外：体ハケ→頸ヨコナデ・口ヨコナデ 内：体ハケ→口頸ヨコナデ	良	石・白・海	にぶい褐色	
17	甕A	6E18	Ⅱ	口1/8	口14.6	外：頸ヨコナデ→体ハケ 内：ヨコナデ	良	石・雲・角	浅黄橙	
18	甕A	18D12	Ⅱ	口1/5	口16.4	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	堅緻	石・雲・白	にぶい褐	外スス
19	甕A	6E19	Ⅱ	口1/4	口21.8	外：口頸ヨコナデ→体ハケ 内：ヨコナデ	良	石・チ・雲・角	にぶい橙	
20	甕A	5G22	Ⅱ	口1/8	口16.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	堅緻	白多・石	褐	
21	甕A	6H5	Ⅱ	1/3	口21.0 底 6.0	外：粗い波状文 内：ケズリ→ナデ	良	石・雲・角	にぶい黄橙	体外スス
22	甕B	18D13	Ⅱ	口1/12		外：口頸ヨコナデ→体ハケ 内：口ナデ→頸体ハケ	堅緻	白・雲・石少	にぶい赤褐	
23	甕B	18D14	Ⅱ	口1/12		外：口頸ヨコナデ→体ハケ 内：口ヨコナデ→体ハケ	堅緻	白・雲・石少	にぶい橙	体外スス
24	甕B	4F23	Ⅱ	口1/12	口14.0	外：口ヨコナデ→頸ハケ→ミガキ 内：ハケ→ミガキ	堅緻	白・雲・石少	暗赤褐色	体外スス
25	甕B	17H14	Ⅱ	口1/8	口17.6	外：口ヨコナデ、体ハケ 内：口ヨコナデ、体ケズリ→ナデ	良	チ・石	橙	口外スス
26	甕B	17H24	Ⅱ	口1/8	口17.8	外：口ヨコナデ 内：ナデ	良	チ・石・角少	にぶい橙	
27	甕B	17H19	Ⅱ	3/4	口16.0	外：体ハケ→口頸ヨコナデ 内：ハケ→ヘラナデ	良	石・角・チ	にぶい黄橙	
28	甕B	6E25	Ⅱ	3/5	口16.8	外：体ハケ→口頸ヨコナデ	良	白・チ・雲	にぶい橙	外スス
29	甕B	17I5	Ⅱ	1/2	口13.6	外：体ハケ・ケズリ→口頸ヨコナデ 内：体ハケ、口ヨコナデ	良	角・石・チ	にぶい黄橙	
30	甕B	11F12	Ⅱ	口1/12		外：体ハケ→口ヨコナデ 内：体ケズリ→口ヨコナデ	良	石・礫・チ・角	にぶい橙	体外スス
31	甕B	15D15	Ⅱ	口1/2	口15.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	良	礫多・石	にぶい橙	
32	甕C	7F24	Ⅱ	3/5	口15.6 底 2.8 高23.0	外：口擬凹線文、頸ヨコナデ→体ハケ 内：体ハケ→口ヨコナデ	良	石・チ・角	橙	外スス・炭
33	甕C	4G20	Ⅱ	口1/8	口13.8	外：口擬凹線文 内：ヨコナデ	良	角・チ・石	にぶい褐	
34	甕C	4F18	Ⅱ	口1/12	口14.2	外：口擬凹線文、頸ヨコナデ→口指頭押圧 内：ヨコナデ→指頭押圧	堅	石多・チ	灰褐	外スス
35	甕C	4G3	Ⅱ	口1/8	口14.2	外：口ヨコナデ→頸ヨコナデ 内：ヨコナデ	良	チ	浅黄橙	外スス
36	甕C	4G19	Ⅱ	口1/8	口14.4	外：頸ヨコナデ→口ヨコナデ→体ハケ 内：ヨコナデ	良	チ・石	にぶい黄橙	外スス
37	甕C	4G9	Ⅱ	口1/9	口16.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	堅緻	礫・角・チ	にぶい黄橙	
38	甕C	6G10	Ⅱ	1/3	口15.4	外：体ハケ→口頸ヨコナデ 内：ハケ→ナデ	良	チ・角少	にぶい黄橙	
39	甕C	94-2Tr	Ⅱ	口1/12		外：ヨコナデ 内：ハケ→ナデ	良	チ・雲・角	灰白	

No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	法量(cm)	成　形・調　整	焼成	胎　土	色　調	備　　考
40	甕C	7H1	Ⅱ	口7/8	口18.8	外：頸ヨコナデ→口ヨコナデ、体ハケ 内：ヨコナデ	堅緻	石・チ・角	にぶい橙	
41	甕D	6E	Ⅱ	口1/3	口17.2	外：口体櫛描波状文、頸櫛描廉状文 内：ミガキ	堅緻	白多・石・角	にぶい黄橙	
42	甕D	6E7	Ⅱ	口1/12		外：口ハケ→波状文 内：ミガキ	堅緻	白・石・角	橙	
43	甕D	4G17	Ⅱ	口1/6	口21.0	外：ヨコナデ→櫛描波状文 内：不明	良	白・石	灰黄褐	
44	甕D	6E	Ⅱ	完形	口14.0 底 5.2 高16.6	外：ミガキ 内：ミガキ	良	白・石		
45	甕D	6E	Ⅱ	口1/12	口14.2	外：ハケ→櫛描波状文 内：ミガキ	良	白・石		
46	甕D	11F16	Ⅱ	一部		外：頸櫛描波状文、体ＬＲ縄文 内：ミガキ	良	白・チ・角	にぶい褐	
47	甕E	7C21	Ⅰ	口1/12	口12.4	外：口ヨコナデ、体タタキ 内：口ヨコナデ、体ケズリ	良	石・雲	にぶい橙	
48	甕E	9D11	Ⅱ	口1/12		外：口ヨコナデ、体タタキ 内：ヘラナデ	良	白	にぶい褐	
49	甕F	6H9	Ⅱ	1/3	口10.0	外：口体脚ハケ 内：口脚ハケ、体ナデ	良	雲・角・チ	橙	体内外下半：炭
50	甕F	7H1	Ⅱ	口1/10	口17.2	外：口ナデ→体ハケ 内：口ハケ→ナデ、体ナデ	良	石・チ	橙	
51	甕F	16D17	Ⅱ	口1/12		外：体ハケ→頸ヨコナデ 内：体ナデ	良	白多・雲	褐灰	
52	甕F	11F15	Ⅱ	口1/8	頸 5.7	外：口ヨコナデ、体ハケ 内：口ヨコナデ、体ナデ	良	石・チ・白	明赤褐	
53	甕F	7H1	Ⅱ	脚2/3	脚 8.2	外：脚ハケ 内：脚ナデ	良	石・チ	にぶい橙	
54	甕G	13F16	Ⅱ	口1/12	口 8.1	外：口ヨコナデ→刺突、頸ハケ 内：口ヨコナデ	良	石・チ少	にぶい橙	
55	甕H	6E18	Ⅱ	口1/6	口13.0	外：口体ヨコナデ→体ミガキ 内：ミガキ	堅緻	石・雲少	にぶい橙	
56	壷	5G14	Ⅱ	口1/12	口17.6	外：赤色塗彩→ミガキ 内：赤色塗彩→ミガキ	堅緻	白・チ	暗赤褐	頸炭、内外赤
57	壷	7G16	Ⅱ	頸1/8	頸 5.8	外：頸ハケ→ナデ 内：頸ミガキ、体ハケ	堅緻	石・雲	にぶい橙	
58	小型壷	6E7	Ⅱ	1/2	口11.4 底 6.2 高10.3	外：ハケ→赤色塗彩→ミガキ 内：ハケ→ヨコナデ	堅緻	チ少	にぶい褐	外赤
59	高杯	7F6	Ⅱ	1/4	口12.2 底 9.8 高 9.6	外：杯脚赤色塗彩→ミガキ 内：杯ハケ→ミガキ、脚ヨコナデ	良	チ・雲少	にぶい橙	外赤
60	高杯	6E25	Ⅱ	杯3/5	口15.6	外：杯ハケ→ミガキ 内：杯ハケ→ミガキ	良	チ	明赤褐	
61	小型鉢	7F16	Ⅱ	1/8	口 9.2 底 1.6 高 7.5	外：ミガキ 内：ミガキ	堅緻	白・石・チ・角	橙	
62	小型鉢	18F11	Ⅱ	完形	口 9.8 底 3.5 高 5.2	外：ケズリ 内：ハケ	良	白・石・チ・角	橙	
63	蓋	11E24	Ⅱ	口1/8	口15.4	外：ナデ 内：ミガキ	良	石多・チ	橙	

別表４　奈良・平安時代須恵器・土師器・灰釉陶器観察表

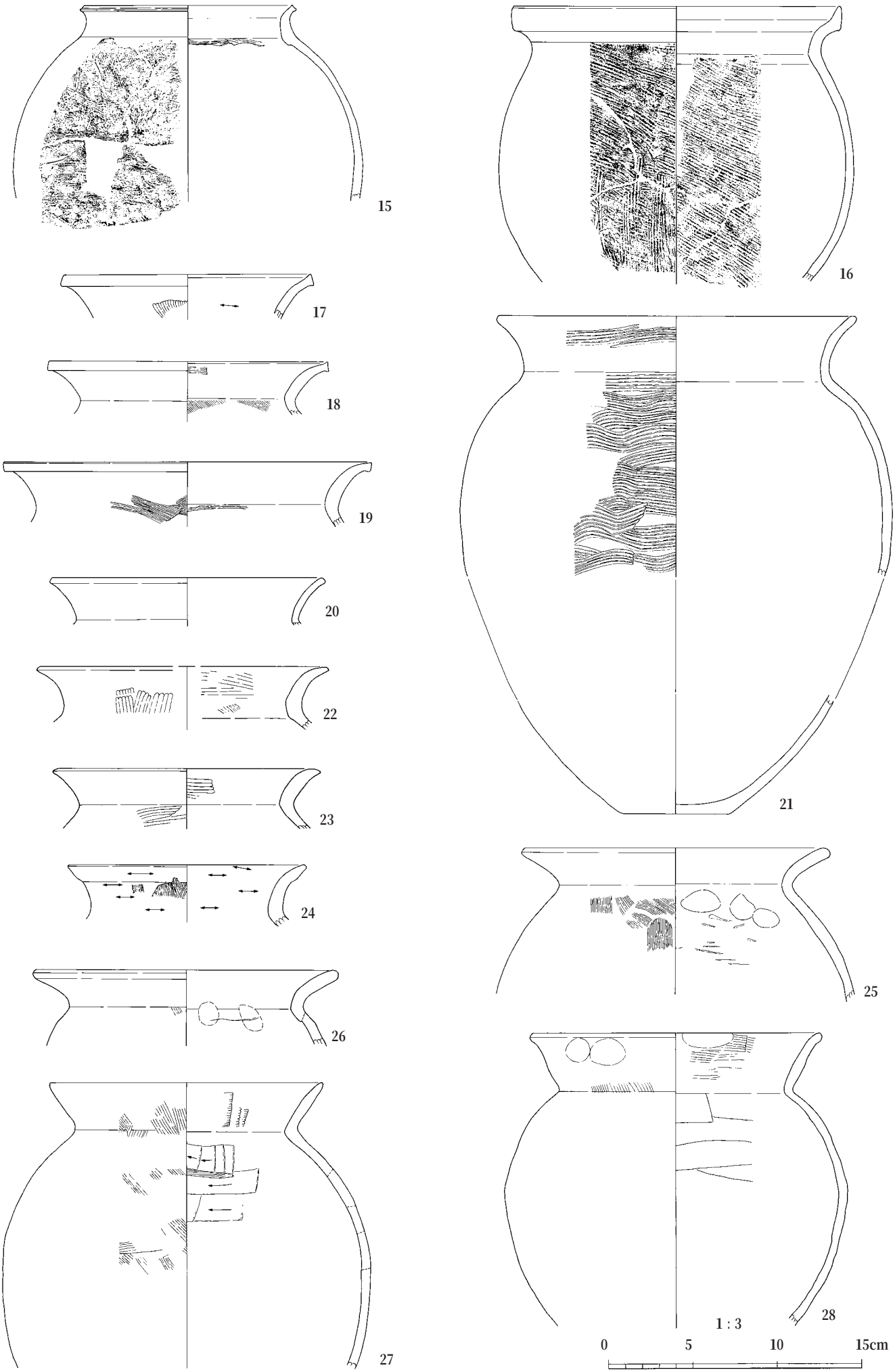
No.	器　種	出土地点	層位	遺存度	法量(cm)	成　形・調　整	焼成	胎　土	色　調	備　　考
64	須恵器 有台杯	4G2	Ⅱ	3/8	口15.4 底12.0 高　4.2	体ロクロナデ 底ロクロケズリ 高台貼付	堅緻	砂礫多	灰 外：黒灰	左回転ケズリ 左回転ケズリ 高台内端接地
65	須恵器 有台杯	4G2 他	Ⅱ	口1/5	口15.2 底11.4 高4.1	体ロクロナデ 底ロクロケズリ 高台貼付	堅緻	礫・白	灰	
66	土師器 無台杯	17H5	Ⅱ	1/8	口12.6 底 5.5 高 3.8	内外ロクロナデ 底回転糸切り	軟	チ・白 礫	橙	
67	土師器 無台杯	19I3	Ⅱ	1/8	高11.4 底 5.0 高(3.4)	内外ロクロナデ 底回転糸切り	良	雲少	にぶい橙	
68	土師器 無台杯	7H7	Ⅱ	1/8		内外ロクロナデ 底回転糸切り	良	雲・石少	にぶい橙	
69	土師器 甕	18H15	Ⅱ	口1/9	口23.0	外ロクロナデ 内カキ目	良	雲・石	にぶい橙	体外スス
70	土師器 甕	19H11	Ⅱ	口1/5	口21.0	外ロクロナデ 内カキ目	良	雲・石・ 角・チ	明赤褐色	
71	土師器 甕	9H7	Ⅱ	口1/8	口21.5	内外ロクロナデ	良	雲・石・角	にぶい橙	
72	土師器 小型甕	19H1	Ⅱ	口1/12	口12.7	内外ロクロナデ	良	石	橙	
73	土師器 甑	19H3	Ⅱ	一部		外ナデ 内カキ目	良	石多・雲 角	にぶい橙	
74	灰釉陶器 有台杯	19H1	Ⅱ	一部		内外ロクロナデ 高台貼付	堅緻		胎：灰白 釉：灰オリーブ	

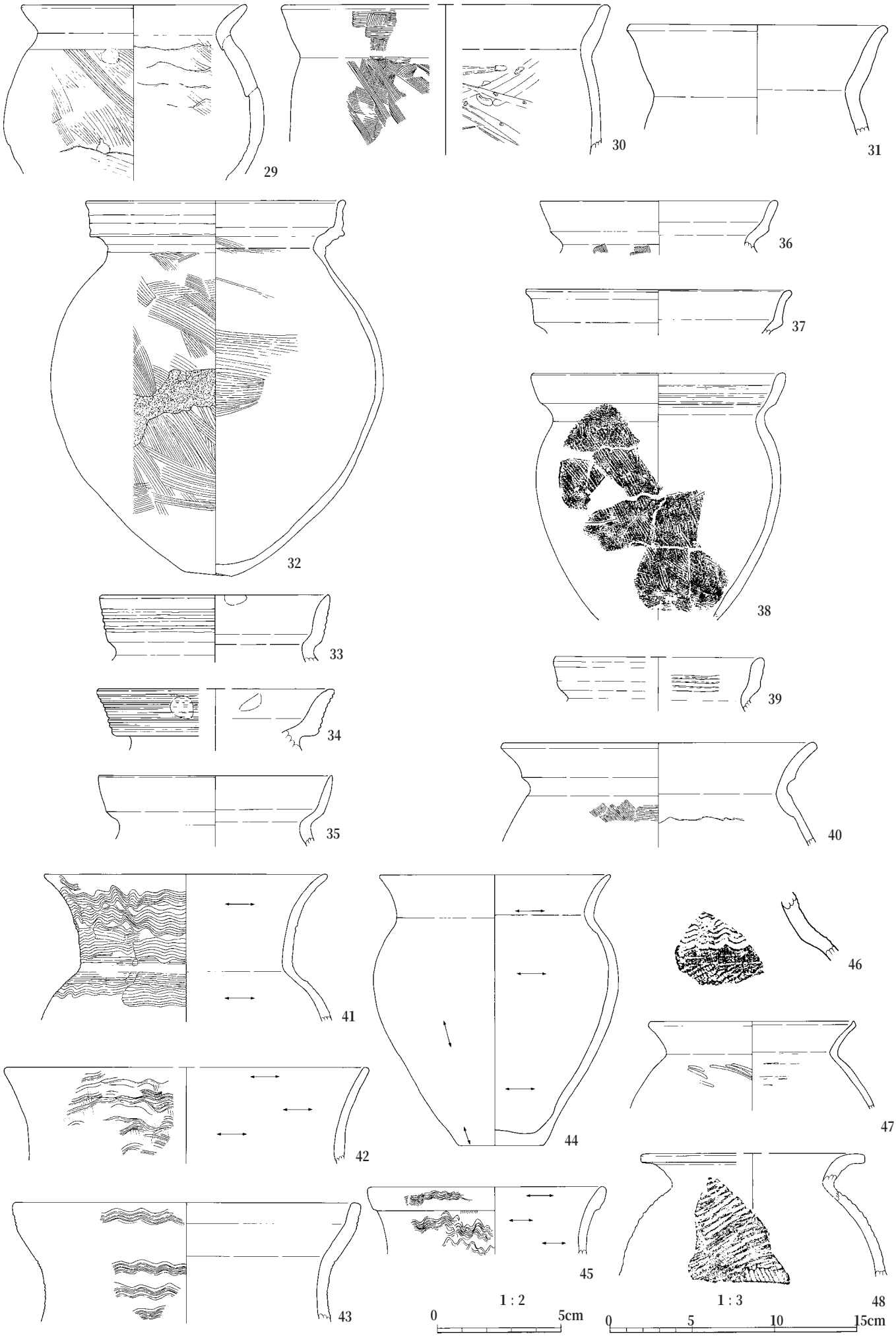
図　　版

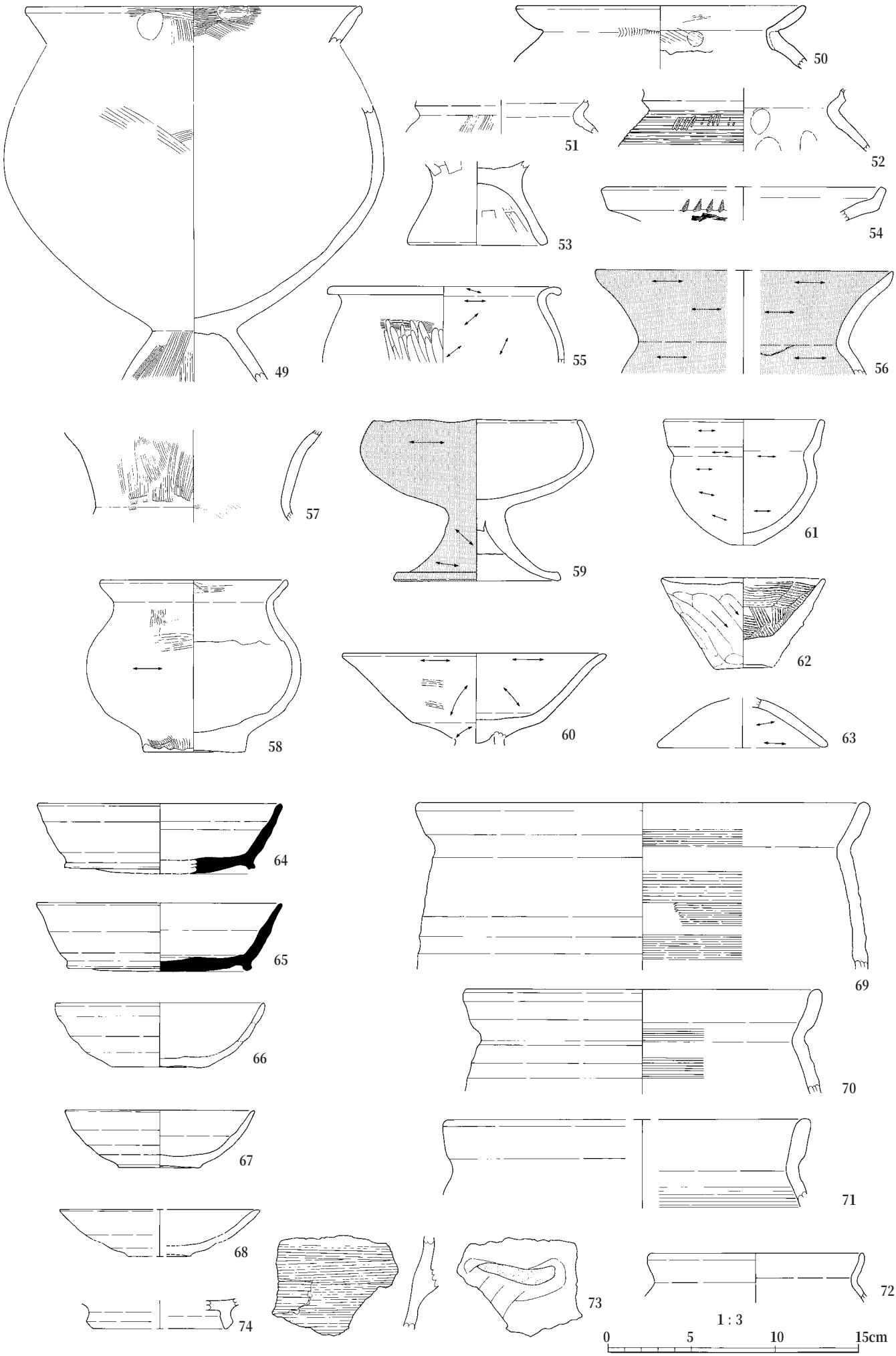
凡　　例

1. 図版は遺物実測図面、写真とで構成している。
2. 各図版には縮尺率およびスケールを付した。遺物の縮尺は１：３を基本としたが、それ以外のものは別途、スケールを表示した。
3. 遺物実測図において、口径復元が困難な場合は中軸線の両側に空白を設けて区別した。
4. 遺物実測図においてスクリーントーンで示したものは、が赤色塗彩、が炭化物を表す。また、土器内外面の調整方向はヘラミガキ調整を ⟶、ヘラナデ・ケズリ調整を ⟶ の矢印で表すこととする。

1
2
3
4
5
6
8
7
9
10
11
12
13
14
6・8は等倍
1 : 2（5・7・9）
0 5 10cm
1 : 3（その他）
0 5 10 15cm


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
1 : 3
0
5
10
15cm


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
1 : 2
0
5cm
1 : 3
0
5
10
15cm


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
1 : 3
0
5
10
15cm

国土地理院 1971年11月2日撮影

図版６

遺跡現況（南から）

遺跡現況（北から）

調査区北側作業風景

図版７

基本層序

１・２Ｆ
メインセクション
土層断面

東側工事用道路部分
完掘状況

図版８

遺物出土状況

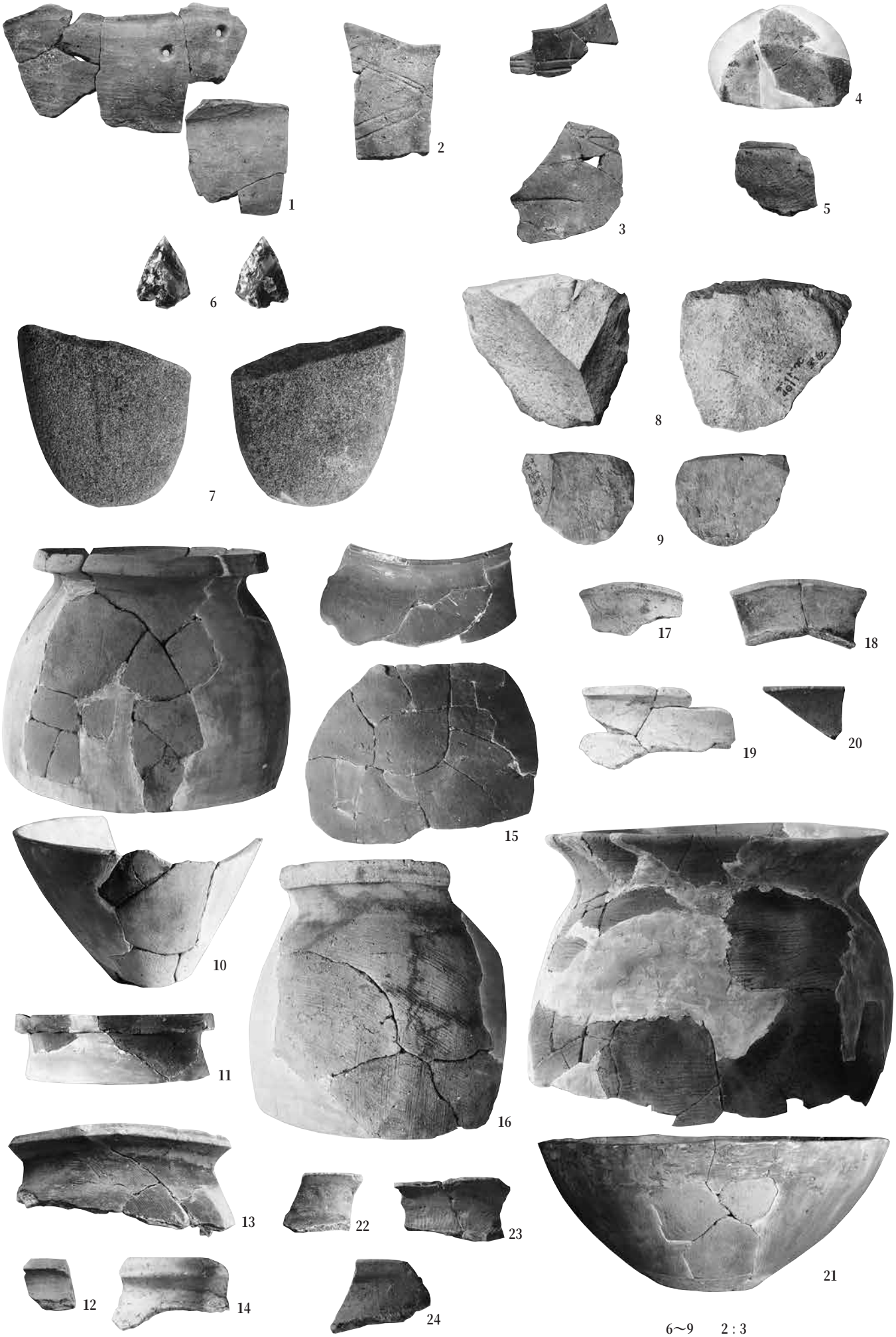
６・７列の沢
遺物検出状況（西側）

６・７列の沢完掘状況

６・７列の沢遺物出土状況
（東側）

西側調査範囲中央部
完掘状況

調査区北側完掘状況



6〜9　2 : 3
その他　1 : 3

25

26

29

30

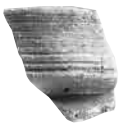
31

27

28

32

33


34

35

36

37

39

38

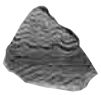
40

41

42

45

43


46

44

1 : 3

47
50
48
52
51
53
54
55
56
49
57
58
59
61
63
60
62
64
71
69
72
67
73
65
70
66
68
74
1 : 3

報告書抄録

書　　名	大洞原（だいどうはら）Ｃ遺跡
副　書　名	上信越自動車道関係発掘調査報告書
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第85集
編・著者名	三ツ井朋子、田海義正、星奈津子、武田孝昭
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956　新潟県新津市大字金津93番地１
発行年月日	1997年７月30日

所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
大洞原Ｃ遺跡	新潟県中頸城郡妙高村 大字坂口新田字山谷地 244番地３ほか	15－547 －８	36度 54分 42秒	138度 13分 07秒	19950424 ～19950811	11,580	上信越 自動車道 建設

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大洞原Ｃ遺跡	遺物包含地	弥生時代後期末～ 古墳時代前期 奈良・平安時代		古式土師器５箱 須恵器　点、土師器　点 灰釉陶器１点	

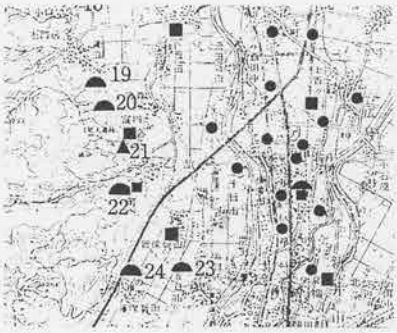
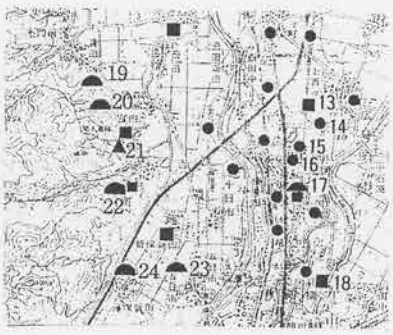
新潟県埋蔵文化財調査報告書　第85集

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ

大洞原（だいどうはら）Ｃ遺跡

平成９年７月25日印刷　　発行　新潟県教育委員会
平成９年７月30日発行　　編集　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956　新潟県新津市大字金津93番地１
電　話　0250－25－3981
ＦＡＸ　0250－25－3986

『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第85集
上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ　大洞原Ｃ遺跡』

正誤表

頁	行	誤	正
	挿図目次	第２図　遺跡周辺の地形	第２図　周辺の地形
	挿図目次	第４図　遺跡周辺の遺跡分布図	第４図　周辺の遺跡分布図
1	第１図	大同原Ｃ遺跡	大洞原Ｃ遺跡
3	第２図	大同原Ｃ遺跡	大洞原Ｃ遺跡
5	第３図	大同原Ｃ遺跡	大洞原Ｃ遺跡
6	25	関川右岸	関川左岸
8	6	関川右岸	関川左岸
10	第５図	平成６年６月調査範囲（左側）	平成５年10～11月調査範囲
7	第４図	遺跡番号欠落　13～18